（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第61輯

山ノ内遺跡Ⅱ他

（山ノ内・山直北・二俣池北遺跡）

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴う発掘調査報告書

1990

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会

（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第61輯

山ノ内遺跡Ⅱ他

（山ノ内・山直北・二俣池北遺跡）

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴う発掘調査報告書

１９９０

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会

調査地遠景（二俣池より南側を望む）

調査地遠景（二俣池より北側を望む）

二俣池西側堤防Cトレンチ土層断面（北から）

二俣池調査地点遠景（東から）

序　　文

私どもの大阪府埋蔵文化財協会では、岸和田市の通称山直谷を縦断するように走る、主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線内にある埋蔵文化財の発掘調査を1985年度から担当して、今年で６年目になります。この間、国道26号線から近畿自動車道松原海南線までの区間について、本年３月共用開始を目標に鋭意発掘調査を続けてまいりました。少しでも発掘調査のできる部分から調査に着手してきた関係上、対象遺跡の一部について未調査地区が残り、昨年度新たに追加調査を行うことになりました。

ここに「山ノ内遺跡II」として報告いたします遺跡は、すでに報告書を刊行しております山ノ内遺跡、山直北遺跡、二俣池北遺跡の三遺跡の未調査部分についての調査成果を一冊にまとめたものです。いずれの調査も既報告の成果と照らし合わせて、はじめてそれぞれの遺跡の具体的な意味が理解できるものであります。本書を活用するにあたっては既報告の調査成果も参考にしていただければ幸いです。

本調査を実施するにあたって、大阪府教育委員会、大阪府土木部岸和田土木事務所、岸和田市教育委員会、地元自治会をはじめとする関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝致しております。今後とも当協会の事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成２年９月

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会

理事長　仁賀奈　祐吉

例　　言

1．本書は主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設予定地内に所在する、山ノ内遺跡その3（山直北遺跡・二俣池北遺跡の調査を含む）の発掘調査報告書である。

2．調査は大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。

3．調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課第2班（班長　山本　彰）が担当し、技師　田中龍男が現地調査にあたった。調査は1989年8月30日に現地調査を開始し、同年12月25日に終了した。引き続き二俣池南側堤防の調査を1990年1月8日から同年2月10日まで実施した。

4．調査の実施にあたっては、大阪府土木部岸和田土木事務所、岸和田市教育委員会及び地元関係各位の協力を得た。

5．調査及び報告書作成にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課の他、有井広幸（京都府教育委員会）、積山　洋（大阪市文化財協会）、近藤利由（岸和田市教育委員会）の各氏から御指導、御教示を得た。記して感謝の意を表する（敬称略）。また、調査中には当協会職員冨加見泰彦、岡戸哲紀、駒井正明、木下　亘の協力を得た。

6．本書に使用している地区割方法は、当協会の発掘調査規程により国土座標第Ⅵ系を基準に設定したものである。また、本書で用いた遺構の呼称、地区名の表記方法についての大要は第Ⅲ章第1節に一括して示した。

7．本書の挿図の方位は座標北を示し、標高はT.P.で示している。

8．本書で用いた色調の表現は『新版標準土色帖』7版　1987年1月（日本色研事業株式会社）の色片との比較で記載している。

9．遺構写真撮影は調査担当者の責任で行い、遺物写真の撮影、焼き付けについては当協会資料班が担当した。

10．遺物図には通し番号を付し、本文中の遺物番号は遺物図、図版遺物番号と一致する。

11．本書の作成及び編集は田中が行った。

12．調査・整理の過程で作成した図面類、写真、出土遺物等は、当協会資料班に保管している。

目　　　次

序　文
例　言
第Ⅰ章　調査に至る経過……1
第Ⅱ章　立地と環境……2
第Ⅲ章　調査の成果……5
第１節　調査の方法と概要……5
第１項　地区名の呼称と略号……5
第２項　調査の方法と概要……7
第２節　山ノ内遺跡の調査……8
第１項　検出遺構と遺物……8
第２項　包含層出土遺物……19
第３節　山直北遺跡の調査……26
第１項　検出遺構と遺物……26
第２項　包含層出土遺物……36
第４節　二俣池北遺跡の調査……40
第１項　二俣池西側堤防の調査……40
１．西側堤防の試掘調査……40
２．西側堤防の検出遺構と遺物……42
第２項　二俣池南側堤防の調査……55
１．検出遺構と遺物……56
２．包含層出土遺物……62
第Ⅳ章　まとめ……64

挿 図 目 次

第１図　　岸和田市位置図……1

第２図　周辺遺跡分布図……3
第３図　地区割模式図（１）……6
第４図　地区割模式図（２）……7
第５図　山ノ内遺跡調査地位置図……8
第６図　山ノ内遺跡遺構配置図……9～10
第７図　山ノ内遺跡南壁土層断面及び北・西・東壁土層断面柱状図……11～12
第８図　１－ＯＯ平面・断面図……13
第９図　１－ＯＯ出土土器……13
第10図　69－ＯＯ平面・断面図……14
第11図　29・41・44・66・75・76－ＯＯ平面・断面図……15
第12図　２・４・５－ＯＰ平面・断面図……16
第13図　19－ＯＰ出土土器……16
第14図　３・11・18・21・22・54－ＯＰ平面・断面図……17
第15図　包含層出土土器(1)……19
第16図　包含層出土土器(2)……21
第17図　包含層出土土器(3)……22
第18図　包含層出土石製品……24
第19図　山直北遺跡調査地位置図……26
第20図　山直北遺跡遺構配置図……27～28
第21図　山直北遺跡北壁土層断面及び西・南・東壁土層断面柱状図……29～30
第22図　27・28・29－ＯＳ断面図……33
第23図　28－ＯＳ出土土器……34
第24図　包含層出土土器（１）……37
第25図　包含層出土土器（２）……38
第26図　包含層出土石製品……39
第27図　既往の調査地点……40
第28図　二俣池北遺跡調査地位置図……40
第29図　二俣池西側堤防試掘トレンチ位置図……41
第30図　二俣池西側堤防Ａトレンチ断面図……43
第31図　16・21・26・31－ＯＯ平面・断面図……44

第32図　8・9・10・11・14・15・34・36－OP平面・断面図……47
第33図　2－OS出土土器……50
第34図　50－OD平面・断面図、北側断面図……51
第35図　二俣池北遺跡（西側堤防）遺構配置図……53～54
第36図　二俣池南側堤防断面図……55
第37図　二俣池北遺跡（南側堤防）遺構配置図……57～58
第38図　1－OS、2・3－OO、4－OX平面・断面図……59
第39図　10・14・15・17－OP平面・断面図……60
第40図　16－OP出土土器……62
第41図　16・18・19－OP平面・断面図……62
第42図　包含層出土土器……63

表目次

第1表　山ノ内遺跡ピット計測表……25
第2表　山直北遺跡ピット計測表……39
第3表　二俣池北遺跡ピット計測表（西側堤防の調査）……52
第4表　二俣池北遺跡ピット計測表（南側堤防の調査）……63

図版目次

巻頭図版一　上　調査地遠景（二俣池より南側を望む）
　　　　　　下　調査地遠景（二俣池より北側を望む）
巻頭図版二　上　二俣池西側堤防Cトレンチ土層断面（北から）
　　　　　　下　二俣池調査地点遠景（東から）

図版一　山ノ内遺跡全景「1986年調査時撮影」（南東から）
図版二　上　山ノ内遺跡　調査区遠景（南東から）

下　山ノ内遺跡　調査区全景（北西から）

図版三　上　山ノ内遺跡　調査区北壁土層断面（南から）

下　山ノ内遺跡　調査区西壁土層断面（東から）

図版四　山ノ内遺跡　1，1－OO検出状況、2，1－OO遺物出土状況、3，11－OP断面、4，18－OP断面、5，22－OP断面、6，69－OO断面

図版五　上　山直北遺跡　調査区遠景（南から）

下　山直北遺跡　調査区全景（南東から）

図版六　上　山直北遺跡　調査区東壁土層断面（西から）

下　山直北遺跡　調査区西壁土層断面（東から）

図版七　山直北遺跡　1，28－OS遺物出土状況（西から）、2，同細部、3，27－OS断面、4，28－OS北側断面、5，28－OS南側断面、6，29－OS断面

図版八　二俣池北遺跡周辺空中写真（1990年2月撮影）

図版九　上　二俣池西側堤防調査区「試掘調査」遠景（東から）

下　二俣池北遺跡　Aトレンチ断面（北から）

図版十　上　二俣池西側堤防調査区遠景（南から）

下　二俣池北遺跡　調査区全景（北西から）

図版十一　上　二俣池北遺跡　50－OD全景（南から）

下　二俣池北遺跡　1，50－OD中央畦断面（西から）、2，50－OD北側断面（南から）、3，4－OP断面、4，6－OP断面

図版十二　二俣池北遺跡　1，2－OS断面、2，9－OP断面、3，10－OP断面、4，11－OP断面、5，14－OP断面、6，15－OP断面、7，34－OP断面、8，36－OP断面

図版十三　上　二俣池北遺跡　調査区遠景（西から）

下　二俣池北遺跡　調査区全景（南から）

図版十四　上　二俣池北遺跡　調査区南壁土層断面（北から）

下　二俣池北遺跡　調査区東側堤防土層断面（西から）

図版十五　二俣池北遺跡　1，1－OS断面、2，2－OO断面、3，3－OO断面、4，16－OP断面、5，18－OP断面、6，19－OP断面

図版十六　山ノ内遺跡　1，1－OO出土遺物、5・15・18～20・24～29・32・39・40，包含層出土遺物

図版十七　上　山ノ内遺跡　34～38，包含層出土遺物

　　　　　下　山ノ内遺跡　41～43，包含層出土遺物

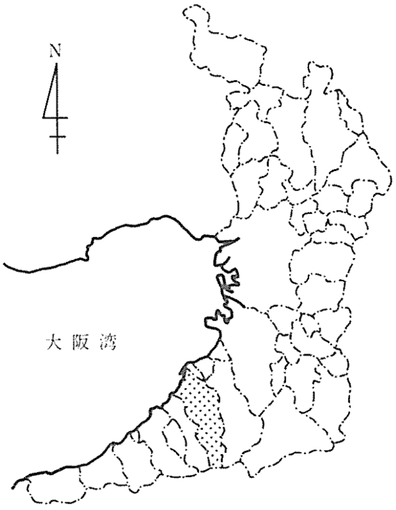
図版十八　山直北遺跡　44・48，28－ＯＳ出土遺物、49～55・57～62，包含層出土遺物

図版十九　上　山直北遺跡　63～65・69・73，包含層出土遺物

　　　　　下　二俣池北遺跡　西側堤防調査　74，２－ＯＳ出土遺物、南側堤防調査　75，16－ＯＰ出土遺物、76～78，包含層出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経過

今回の調査は、近畿自動車道松原海南線の岸和田和泉インターチェンジから阪南インターチェンジまでの区間が、1990年３月29日付で供用開始が決定したため、アクセス道路としての主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線（都市計画道路磯之上山直線[1]）の開通も近畿自動車道松原海南線と併せて行われることとなった。主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線は大阪臨海線磯之上地区と大阪外環状線積川地区を連絡する全長約10㎞の道路である。



第１図　岸和田市位置図

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線の路線敷における遺跡については、1983年に大阪府教育委員会が実施した「都市計画道路磯之上山直線予定地内分布調査[2]」によって、16ヶ所の遺跡が新たに確認されている。大阪府教育委員会は磯之上山直線分布調査の成果を受け、大阪府土木部と道路建設予定地内遺跡の取り扱いについて協議を行った。協議を重ねた結果、道路建設に先立ち予定地内の全面発掘が必要であるとの判断を下し、大阪府土木部へ通知すると共に、財団法人大阪府埋蔵文化財協会に発掘調査の実施を指示した。

以上のことから、1985年から大阪府教育委員会の指導のもと、当協会が発掘調査を担当することとなった。今回の調査は、山ノ内遺跡の未調査部（538㎡）、山直北遺跡の未調査部（535㎡）、二俣池北遺跡（二俣池西側堤防）の試掘調査及び本調査（483㎡）を行い、引き続き二俣池南側堤防の調査（約400㎡）を岸和田土木の委託によって実施した。現地調査は、1989年8月30日に山ノ内遺跡の調査に着手し、同年10月５日からは山直北遺跡の調査も平行しながら行った。山ノ内遺跡は同年11月１日に終了し、山直北遺跡は同年11月10日に終了した。二俣池北遺跡（西側堤防）の試掘調査は同年11月20日から開始し、同年11月30日まで行い、引き続き全面調査を同年12月25日まで行った。また、二俣池南側堤防の調査は1990年１月８日に着手し、同年２月10日に終了した。

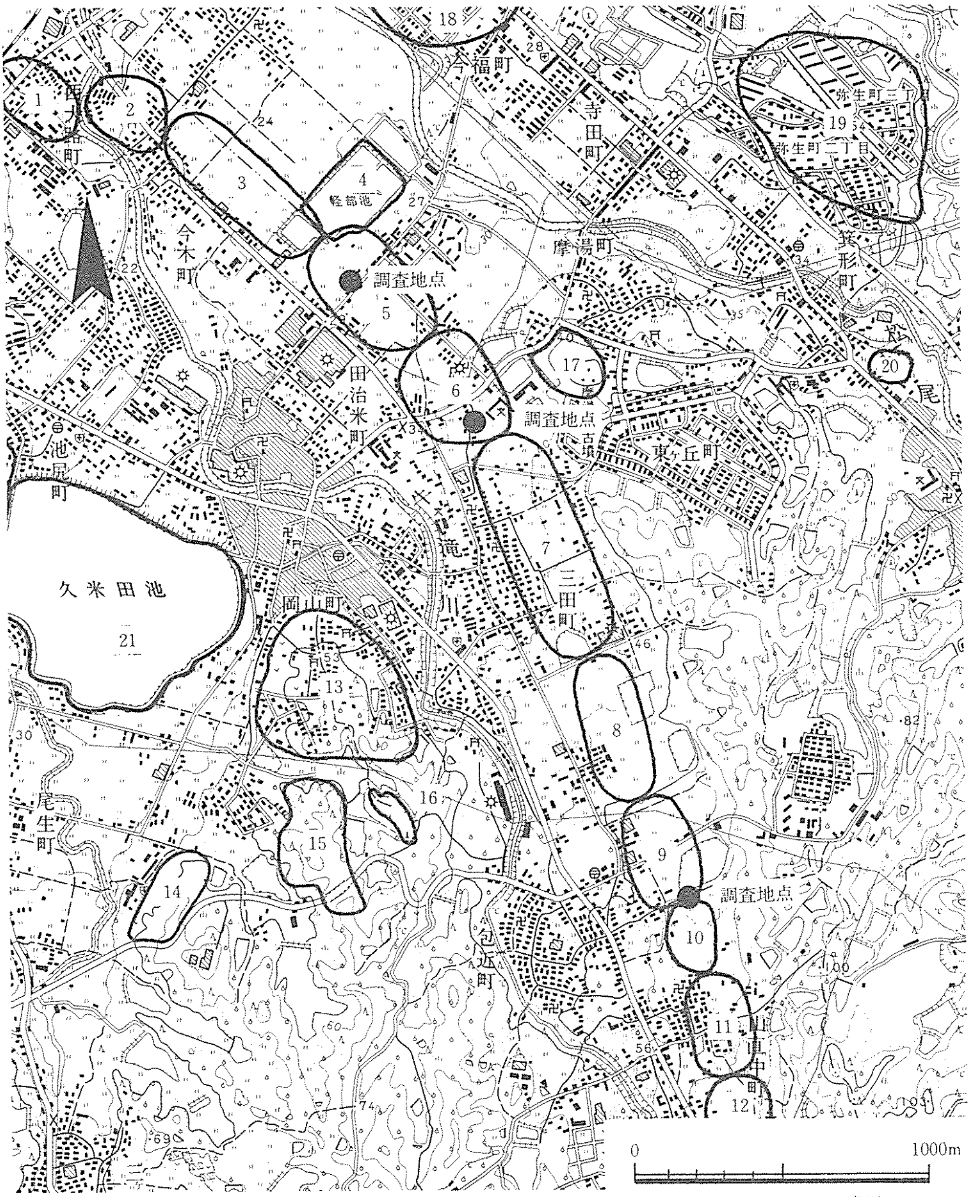
（１）都市計画道路磯之上山直線の名称は、計画・工事中に使用される名称で、路線開通後は、主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線の名称になる。
（２）『三田遺跡試掘調査概要』　大阪府教育委員会　1985

第II章　立地と環境

今回の調査は3遺跡に渡って行った。いずれの遺跡も、牛滝川の右岸に位置している。これらの遺跡は牛滝川とその北側を流れる松尾寺によって形成された沖積段丘面及び氾濫原上に位置している。牛滝川は葛城山に源を発し、牛滝山と岩雄山の間を抜けて北西に向って流れており、松尾川・槇尾川と共に夫々の形成した開析谷の北側で合流し大津川と名称を変えている。この牛滝川流域では、右岸に2～3段の河岸段丘が北側に向けてよく発達し、東山丘陵と呼ばれている。また、左岸の段丘は尾生丘陵と呼ばれ緩やかな斜面地形を形成している。これらの地域は通称山直谷と呼ばれている。この山直谷周辺の調査としては、1972・1973年に元興寺文化財研究所が、尾生丘陵側の分布調査を行っている(1)。大阪府教育委員会が行った分布調査で発見された、主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線の路線敷における遺跡群が本格的に調査され始めたのは1985年以降で、当協会が調査を実施してきた。現在のところ岸和田市の平野部の第2阪和国道付近に位置する箕土路遺跡から、谷筋中央部に位置する山直中遺跡までの12ヶ所の発掘調査がほぼ終了している。12ヶ所の遺跡では、おもに古墳時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物が多数検出されている。また、それらの遺跡の成果を記した発掘調査報告書も数多く当協会が刊行している。今回は隣接する遺跡が多いため、報告書内で重複する歴史的環境の記述は、他の報告書に譲り、今回調査を行った3遺跡に近接した遺跡の調査結果を紹介する。

山ノ内遺跡は岸和田市田治米・摩湯・三田町に所在する遺跡である。隣接する遺跡には軽部池西遺跡、山直北遺跡がある。軽部池西遺跡では縄文時代から中世までの遺構、遺物が検出されている。縄文時代の遺構としては土坑・ピット・溝状遺構のほか、自然流路などを検出している。出土遺物としては、北白川上層式の土器を遺構内から確認しており、縄文時代後期を上限とする遺跡と考えられる。弥生時代では遺構との一括関係から考えると弥生時代中期から弥生時代後期後半の遺構・遺物が検出されている。この時代の遺構として検出されたものには、竪穴住居跡・土器溜・土坑・ピットなどがある。古墳時代の遺構・遺物の検出は極めて少なく、A－4区と呼称される地区で検出された掘立柱建物跡だけであった。奈良時代以降については掘立柱建物跡・土坑・ピットなどが検出されている(2)。

山直谷入口部に立地する山ノ内遺跡の既往の調査では、縄文時代後・晩期の遺構や、弥生時代後期の集落の一部が検出されている。縄文時代の遺構は貯蔵穴や自然河川などが検



1．西大路遺跡
2．今木遺跡・今木廃寺
3．軽部池西遺跡
4．軽部池
5．山ノ内遺跡
6．山直北遺跡
7．三田遺跡
8．上フジ遺跡
9．二俣池北遺跡
10．水込遺跡
11．黒石遺跡
12．山直中遺跡・蓮華光寺跡
13．岡山遺跡
14．赤山古墳群
15．どぞく遺跡
16．三田墓地
17．摩湯山古墳
18．和気遺跡
19．観音寺遺跡
20．Ａ１地点遺跡
21．久米田池

第２図　周辺遺跡分布図

出されている。この時期の遺物としては中津式を初めとする縄文時代後期の土器が出土している。弥生時代から古墳時代の遺構としては、自然河川・竪穴住居・土坑・溝・ピットなどがある。この時期で特に注目されるのは、弥生時代後期の遺構と考えられる竪穴住居である。この竪穴住居は方形プランを呈するもので、１辺６ｍの大型のものと１辺4.5mのものが検出された。２棟とも火災によって廃棄され、住居内に完形の手焙形土器が据え置かれた状態で出土した。中世の遺構としては土坑・ピット・畦畔・水路などがある。[(3)(4)]

山直北遺跡の調査では、弥生時代から室町時代にかけての遺構・遺物が検出された。この地区では縄文時代の遺構はほとんど検出されなかった。弥生時代の遺構としては土坑及び土坑墓が検出された。奈良・平安時代の遺構としては、建物群が検出されている。これらの建物群は切り合い関係から見て、２期に大別することができた。[(4)]

二俣池北遺跡の調査では、古墳時代後期から中・近世にかけての遺構が多数検出されている。古墳時代以前のものとしては、包含層内より弥生時代以前のものと思われる石器が出土しているが、遺構は検出されていない。古墳時代後期から奈良時代の遺構としては竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑・ピットなどがある。４・５区と呼称される地区で検出された多くの建物跡は、建物の構造的特徴や配置、建物の方位、出土遺物などの検討から、大きく７つの時期に分けることができた。また、これらの地区では竪穴住居から掘立柱建物へ変遷していく様子も合わせて確認することができた。中・近世の遺構としては、畦畔や小溝、条里に伴う溝などが検出されたが、住居を示すような遺構は検出されなかった。[(5)]

註
（１）『泉南丘陵地区遺跡に関する分布調査報告書』　（財）元興寺仏教民俗資料研究所　１９７３
（２）『軽部池西遺跡発掘調査報告書』　（財）大阪府埋蔵文化財協会　１９８７
（３）『山ノ内遺跡発掘調査報告書』　（財）大阪府埋蔵文化財協会　１９８８
（４）『山ノ内遺跡Ｂ地区・山直北遺跡発掘調査報告書』　（財）大阪府埋蔵文化財協会　１９８８
（５）『二俣池遺跡発掘調査報告書』　（財）大阪府埋蔵文化財協会　１９８９

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査の方法と概要

第１項　地区名の呼称と略号

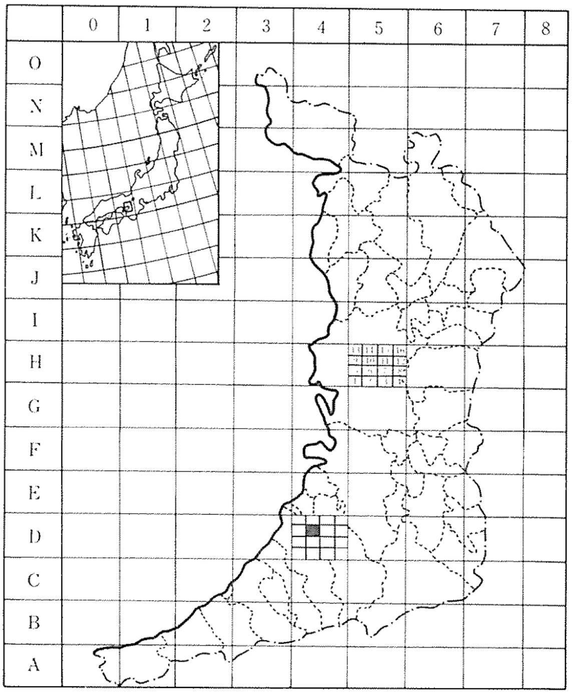
発掘調査及び本書の中で使用している調査区の地区設定、各地区の名称、遺構番号、遺構の略称、遺物登録番号等の略号は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が定めた発掘調査規程に基づいて実施した。

調査では、国土座標法による新平面直角座標第Ⅵ座標系をもとに4m×4mの最小区画を設定しながら実施した。調査区地区割りの基本は大阪府発行新版（昭和59年建設省国土地理院承認）の1/2500の地形図である。地区割りはこの地図を12等分して500mの方形区画を作り、この区画には北西隅から東へＡ～Ｌの記号を付ける。次に、この区画を25等分して100m方形区画を作る。100m区画には北西隅から東へ01～25の番号を与え、さらに100mの方形区画を625等分して4m四方の区画を作る。これによって出来た縦方向25行、横方向25列の4m区画は２文字分のアルファベットでＡＡ、ＡＢと表現している。また、区画表示の際は縦方向を優先し、表現している（第３図参照）。

今回の山ノ内遺跡の調査区はこれらによると大Ｄ－４－10Ｇ－25、大Ｄ－４－10Ｋ－05の２区画内に位置し、山直北遺跡調査区は大Ｄ－４－10Ｌ－24の区画内に位置している（第３図参照）。また、二俣池北遺跡（二俣池西側及び南側堤防の調査）の調査区は大Ｄ－４－３Ｂ－01の区画内に位置している（第４図参照）。

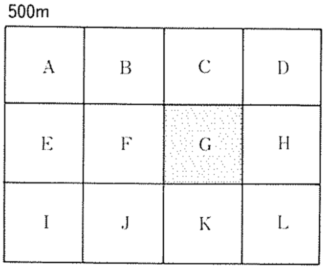
本協会で用いている遺構表記のための記号は、他の組織の記号と混乱しないように独自の表記方法を採用している。遺構の表記方法は、発見された遺構順に１から通し番号を与えて用いる。しかし、今回の調査では３遺跡に分かれているため、各遺跡ごとに１から通し番号を与えた。次に、遺構名（アラビア数字＝１）と遺構の種類（アルファベット＝ＯＳ）によって表現している。遺構名の数字に関しては例えば、掘立柱建物のように複数のピットからなる遺構以外重複することはない。遺構の種類は本協会で定めた略号を用いており、遺構の種類と記号の意味は次のとおりである。

溝	ＯＳ	土坑	ＯＯ	建物	ＯＢ	竪穴住居	ＯＤ
柱穴	ＯＰ	道路	ＯＡ	河川	ＯＲ	不明遺構	ＯＸ

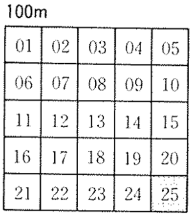


大阪府地区割図

（黒塗り部は大D-4-10）



500ｍの区画



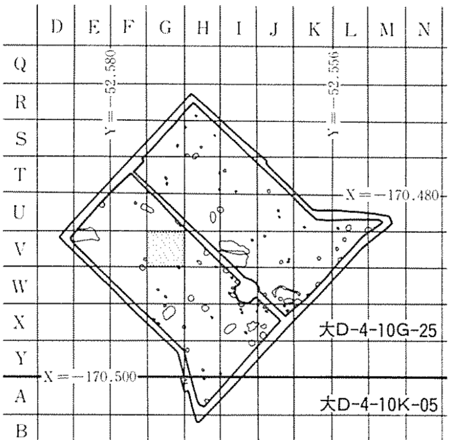
100ｍの区画

（例）

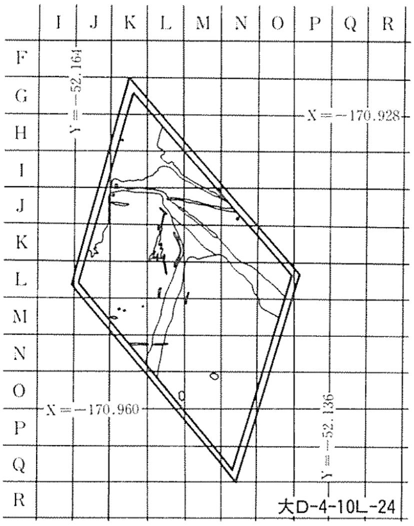
大D-4-10　G　25

（500m）（100m）

（例）　大D-4-10G-25-VG



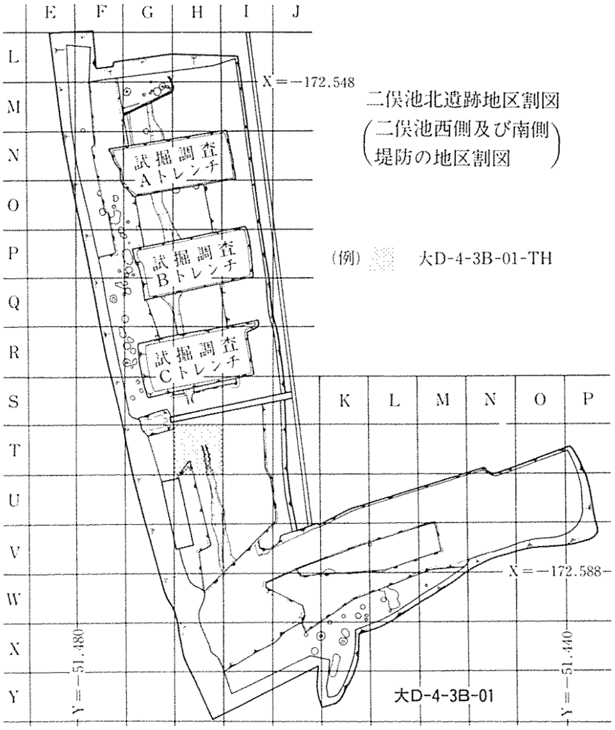
山ノ内遺跡地区割図



山直北遺跡地区割図

第３図　地区割模式図（１）

第２項　調査の方法と概要



第４図　地区割模式図（２）

調査は現代耕土を機械掘削によって除去し、それから下層については人力によって掘削した。

以下に各調査区の調査方法と概要を記す。

山ノ内遺跡は、当協会が昭和61・62年度の２ヶ年に渡って調査を行ってきた。今回の調査は未調査部538m²について行った。

調査は既設建造物の取り壊し後、機械掘削によって盛土及び旧耕作土面を除去した。調査区には４級基準点を設置し、当協会の発掘調査規程に則って行った。調査区内は中〜近世の削平や、現代の撹乱を受けており、遺構・遺物の遺存状態はあまりよくなかった。検出遺構としては縄文時代と思われるものから中世と思われるものなどが検出された。

山直北遺跡の調査は、当協会が昭和61年度に行っている。今回の調査地は未調査部535m²について行った。調査は機械掘削によって盛土及び耕作土を除去した後に行った。調査区内は中〜近世の削平と整地が繰り返され、遺構の遺存状態はよくなかった。検出遺構としては、上部を削平されているため全容は不明であるが、調査区内を東南〜北西に流れていたと思われる古墳時代の溝が検出された。他の検出遺構ではピット・土坑・鋤溝と思われる溝などを検出した。遺物の出土量も少なく、いずれも細片で磨滅していた。

二俣池北遺跡の調査は池の堤防を移築するためのものである。調査は試掘調査から行い、遺構の有無の確認を行った。試掘調査の結果、遺構の存在が確認されたため、二俣池西側堤防の南端部を約45mに渡って全面調査を行った。調査区内は堤防築堤時の削平を受けており、遺構の遺存状態はあまりよくなかった。検出遺構としては古墳時代のものと思われる竪穴住居跡や、中世の溝・ピット・土坑などがある。また、南側堤防の調査も引き続き行ったが、遺構の遺存状態は悪く、南側でピット等の遺構を少量検出しただけである。

第２節　山ノ内遺跡の調査

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線の路線内における山ノ内遺跡の発掘調査は、当協会が昭和61・62年度に行っている。今回の調査地は、岸和田市田治米町に所在し、前回調査地の未調査部分（558㎡）について行った調査である。調査地の地目は宅地であった。

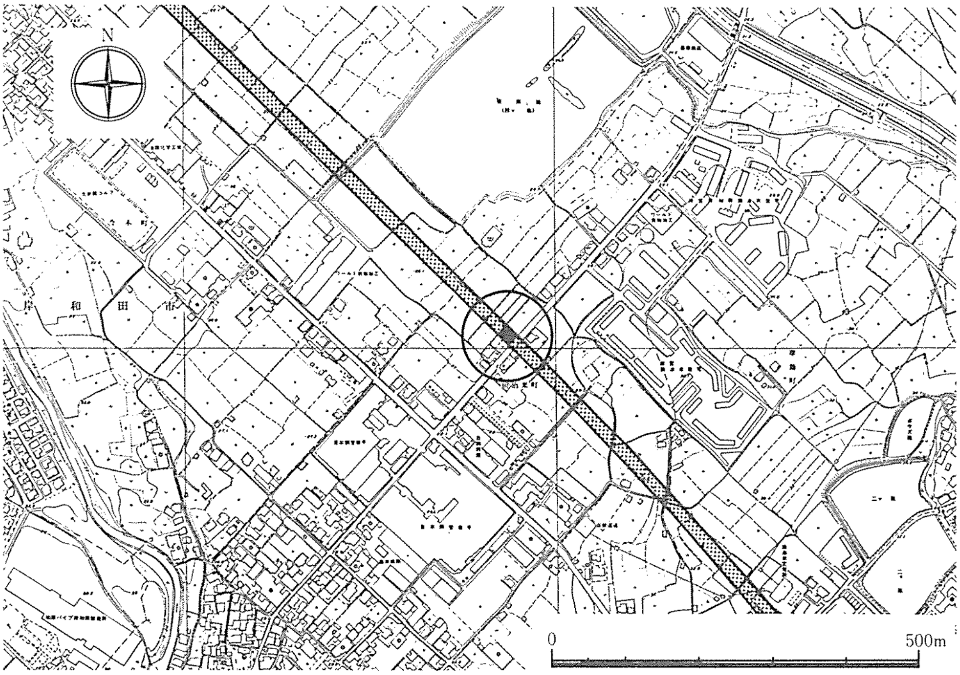
第１項　検出遺構と遺物

遺構の密度はあまり高くないが、調査区のほぼ全域で確認された。検出された遺構はピット・土坑・溝などである。ピットは全体の約54％が柱痕跡をもつが、各ピットの配置からみて掘立柱建物跡を想定することは困難である。各遺構からの出土遺物が極めて少なく、遺構の時期を決定することは困難であった。

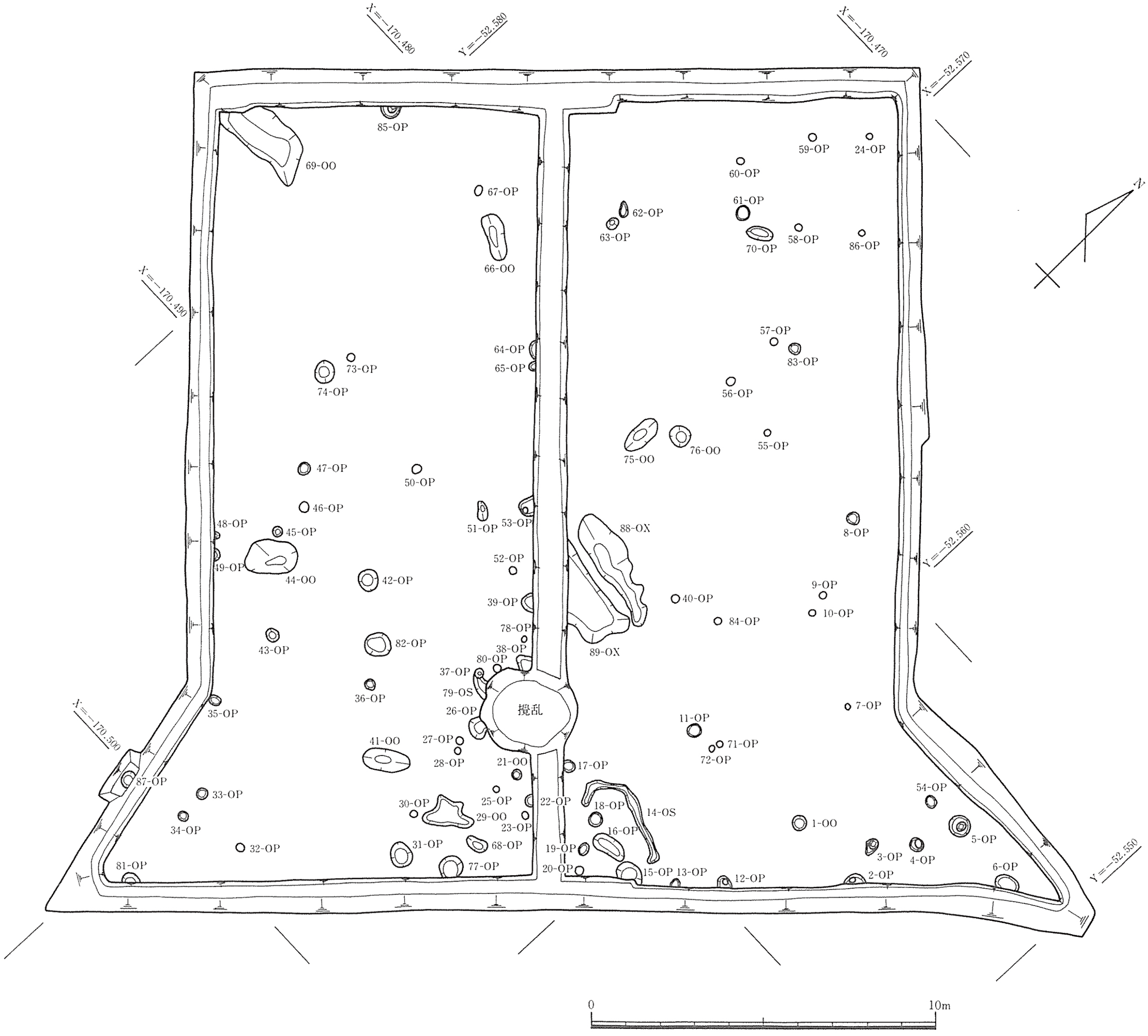
土坑　（ＯＯ）

１－ＯＯ　（第６・８・９図、図版４・16）

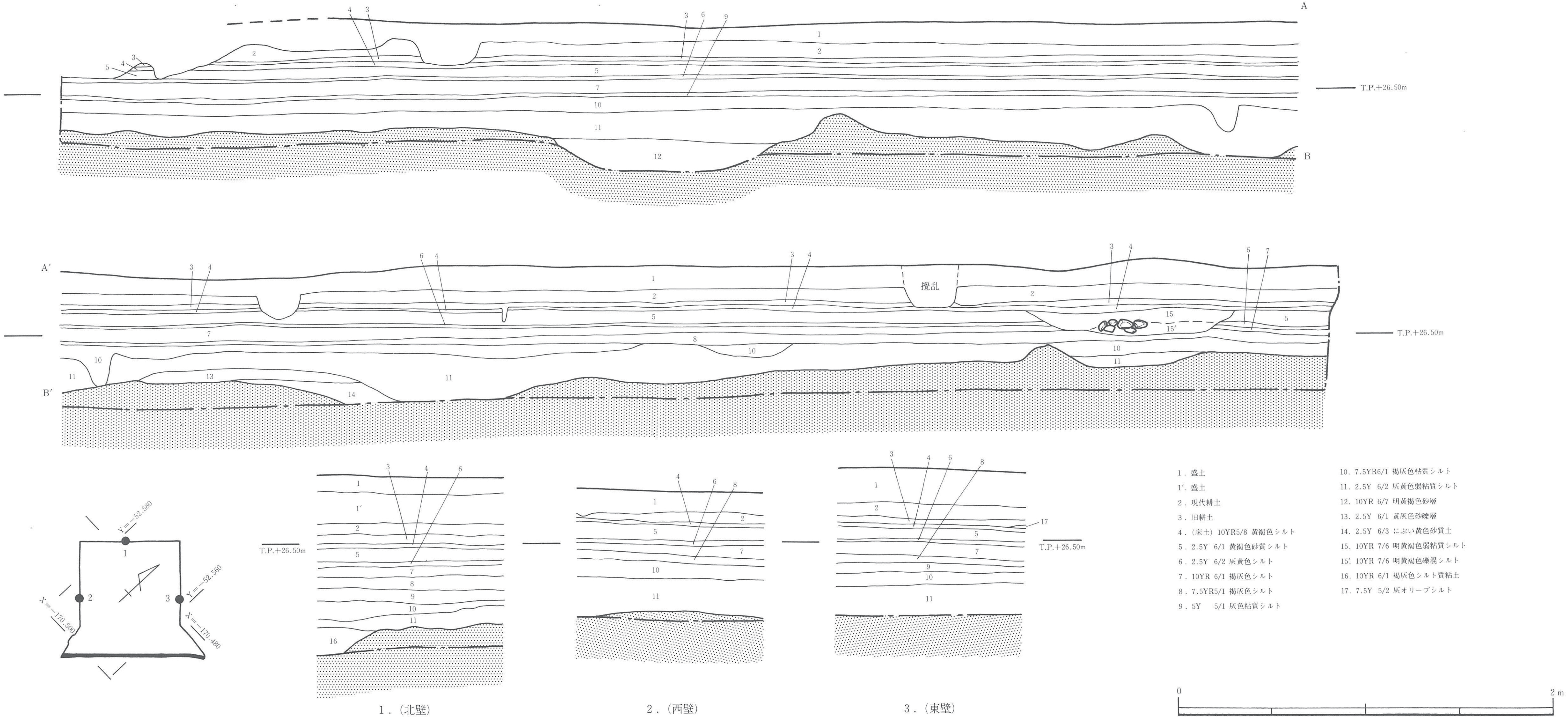
調査区東側のＧ25ＶＫ地区に位置する土坑である。平面形はほぼ円形を呈し、径約42㎝、



第５図　山ノ内遺跡調査地位置図



第６図　山ノ内遺跡遺構配置図



第７図　山ノ内遺跡南壁土層断面及び北・西・東壁土層断面柱状図

深さ21㎝を測る。出土遺物は弥生時代の壺（1）を直立した状態で出土した。体部中ほどより上部は欠損しているが、体部がやや張るタイプである。上部の欠損はおそらく中～近世の削平によるものと思われる。体部外面は、ヘラミガキ調整、内面は剥離が著しく不明である。壺内の埋土は黄褐色シルト（2.5Y5/4）である。形態から中期初頭のものと思われる。

29－ＯＯ　（第６・11図）

調査区北側のG25ＸＩ・ＸＪ地区にまたがって検出した不定形な平面形を呈する土坑である。長辺約1.4m、短辺約65㎝、深さ9㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルト（10ＹR4/2）である。出土遺物は弥生土器壺の底部辺と思われるものが９点出土した。いずれも小片で磨滅が著しいため図化できなかった。

41－ＯＯ　（第６・11図）

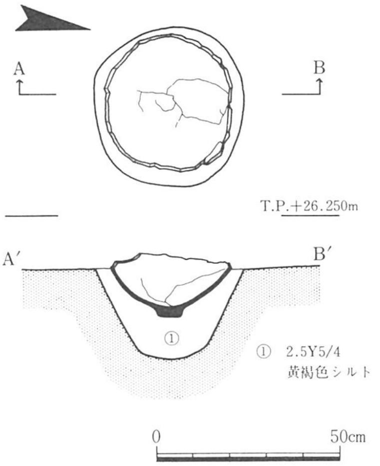
G25ＸＪ地区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径約1.3m、短径約63㎝、深さ35㎝で、埋土は褐灰色粘質土（7.5ＹR5/1）である。埋土中に１㎝前後の礫を多く含む。遺物は出土しなかった。

44－ＯＯ　（第６・11図）

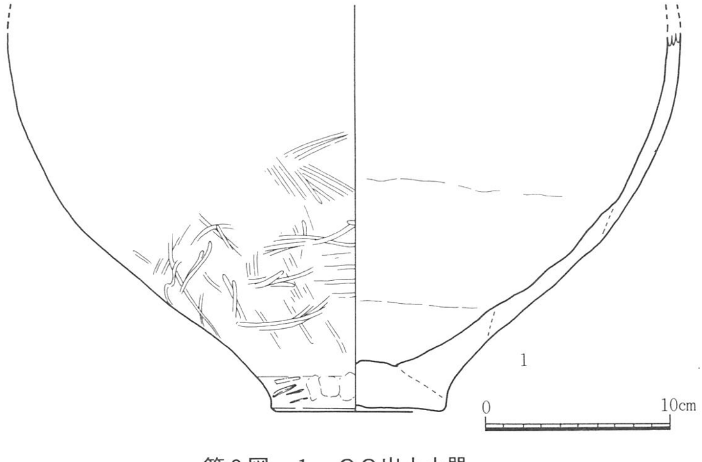
調査区西側のG25ＸG地区に位置する。平面形は不定形な円形を呈する。長径約1.5m、短径約90㎝、深さ42㎝を測る。埋土は礫を多く含み、褐灰色粘質土（7.5ＹR5/1）である。遺物は出土しなかった。

66－ＯＯ　（第６・11図）

調査区北側のG25UF・UG地区にまたがっ



第８図　１－ＯＯ平面・断面図

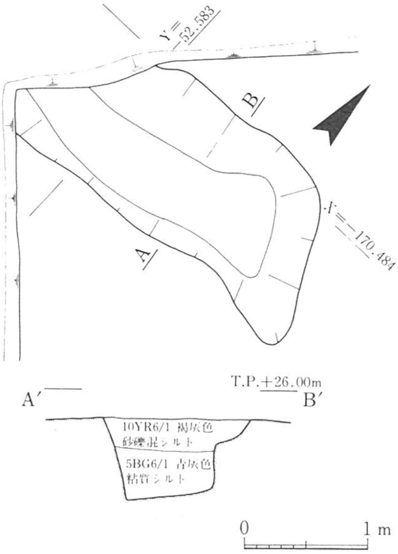


第９図　１－ＯＯ出土土器

て位置する。平面形は不定形な楕円形を呈し、長径約1.3m、短径約50㎝、深さ33㎝である。埋土は褐灰色シルト（10ＹＲ6/1）である。遺物は出土しなかった。

69－ＯＯ　（第６・10図、図版４）

調査区西端のＧ25ＵＥ・ＶＥ地区にまたがって位置する土坑である。西側は調査区外に延びるため全容は不明である。調査区内で検出し得たのは、長辺約2.7m、短径約1.2m、深さ62㎝である。埋土は２層に分かれ、上層は褐灰色砂礫混シルト（10ＹＲ6/1）で下層は青灰色粘質シルト（５ＢＧ6/1）である。遺物は出土しなかった。



第10図　69－ＯＯ平面・断面図

75－ＯＯ　（第６・11図）

調査区のほぼ中央部Ｇ25ＵＨ地区に位置する。平面形は不定形な楕円形を呈し、長径約1.1m、短径約54㎝、深さ25㎝である。埋土は褐灰色シルト（５ＹＲ5/1）である。遺物は出土しなかった。

76－ＯＯ　（第６・11図）

75－ＯＯの東側に位置する土坑である。平面形は円形を呈し、直径約60㎝、深さ23㎝で、埋土は褐灰色シルト（５ＹＲ5/1）である。遺物は出土しなかった。

ピット　（ＯＰ）

３－ＯＰ　（第６・14図）

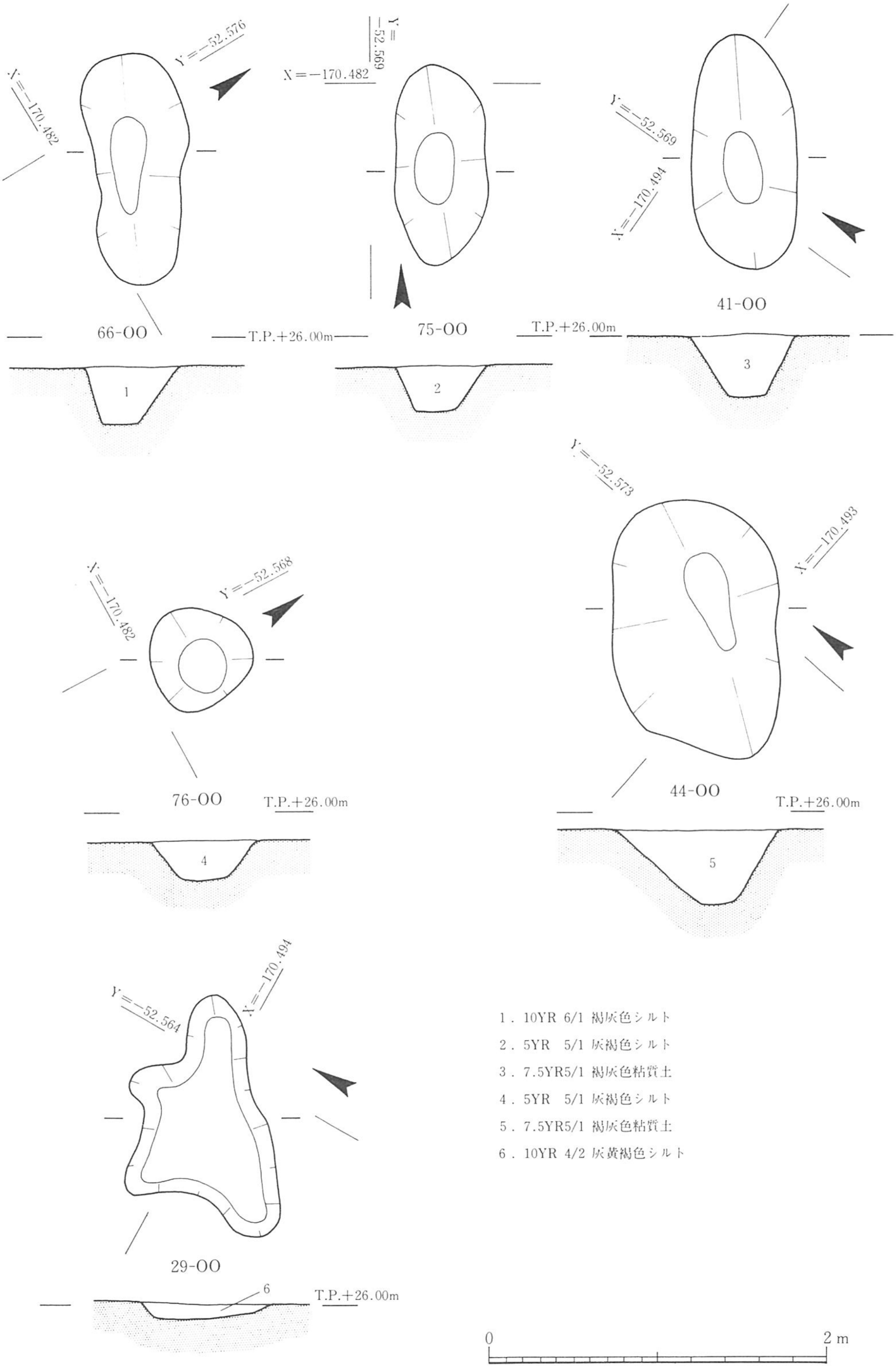
調査区東側のＧ25ＶＬ地区に位置する。平面形は不定形な楕円形を呈するもので、長径約48㎝、短径約32㎝、深さ32㎝である。中央部に径約10㎝の柱痕跡をもつ。埋土はオリーブ褐色シルト（2.5Ｙ4/3）で、遺物は出土しなかった。

２・４・５－ＯＰ　（第６・12図）

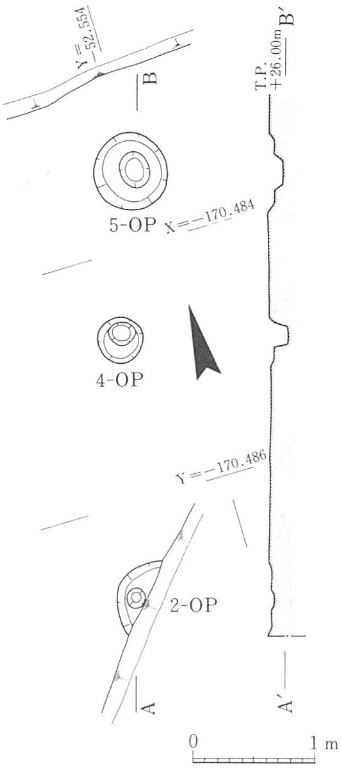
調査区東側のＧ25ＵＬ・ＶＬ地区で検出したピット群である。ほぼ一列にならび、主軸をＮ－15°－Ｅにもつ。

２－ＯＰは南東側をトレンチによって切られている。長径約67㎝、短径約25㎝、深さ４㎝で、径約18㎝の柱痕跡をもつ。埋土は灰黄褐色シルト（10ＹＲ4/2)である。

４－ＯＰは径約38㎝、深さ15㎝の円形プランをもち、中央部よりやや北側に径約22㎝の



第11図　29•41•44•66•75•76－ＯＯ平面・断面図



第12図　2・4・5－OP平面・断面図

柱痕跡をもつ。埋土は灰黄褐色シルト（10ＹR4/2）である。

5－ＯＰはG25ＵＬ地区に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、径約61㎝、深さ11㎝を測る。ほぼ中央部に径約30㎝の柱痕跡をもつ。埋土は灰黄褐色シルト（10ＹR4/2）である。

各ピットの芯々間距離は、2－ＯＰと4－ＯＰが2.1m、4－ＯＰと5－ＯＰが1.3mを測る。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。今回の調査では、調査区の関係上2間分しか検出できなかった。各ピットの平面形はほぼ円形を呈し、径約60㎝前後で深さ11～18㎝を測る。ピットの深さが一様に浅いのは、おそらく後世の削平を受けたためと思われる。建物としてのまとまりは、確認できなかったが、建物の一部の可能性が高いと思われる。

11－ＯＰ　（第6・14図、図版4）

調査区中央よりやや東側のG25ＶＪ地区に位置する。径約39㎝、深さ48㎝の円形ピットで中央部に径約26㎝の柱痕跡をもつ。埋土はオリーブ褐色シルト（2.5Y4/3）である。遺物は出土しなかった。

16－ＯＰ　（第6図）

調査区東南のG25ＷＪ地区に位置する。平面形は不定形な楕円形を呈し、長径約1.3m、短径約47㎝、深さ25㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルト（10ＹR4/2）である。出土遺物は弥生土器の底部と思われるものが7点出土した。いずれも小片のため図化できなかった。

18－ＯＰ　（第6・14図、図版4）

14－ＯＳの南側G25ＷＪ地区で検出した。ピットは径約38㎝で、ほぼ中央部に径約14㎝の柱痕跡をもつ。埋土はオリーブ褐色（2.5Y4/3）で深さ約34㎝である。遺物は出土しなかった。

19－ＯＰ　（第6・13図）

16－ＯＰの南側G25ＷＪ・ＸＪ地区にまたがって位置

第13図　19－ＯＰ出土土器

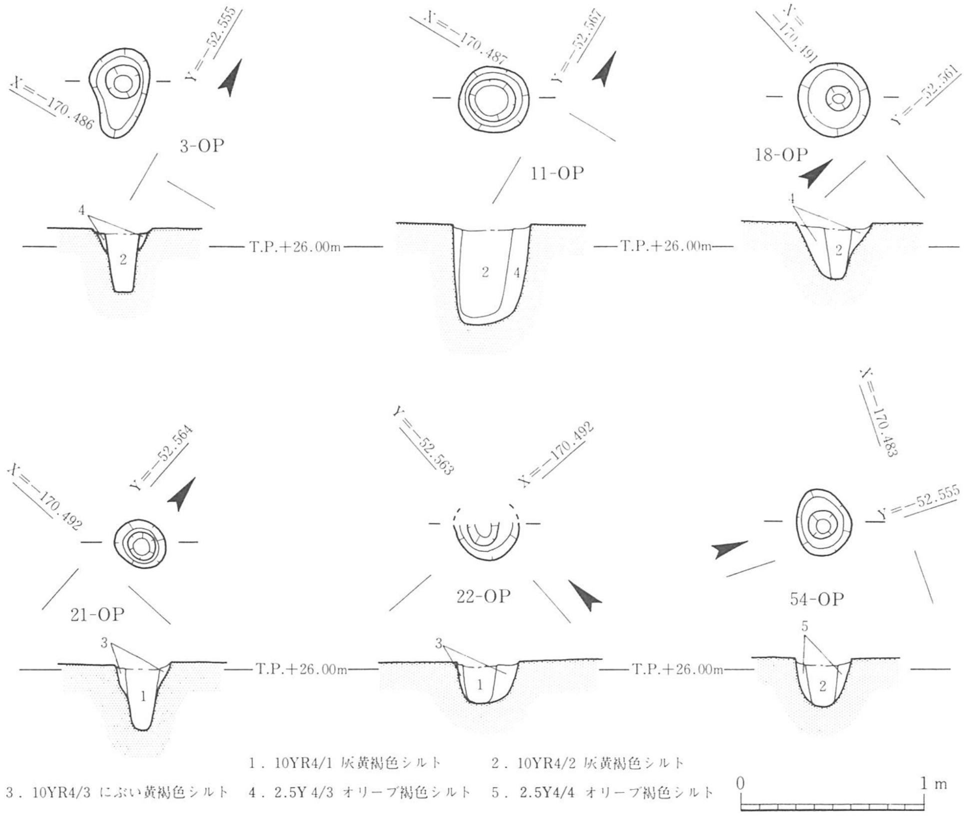
するピットである。平面形は不定形な楕円形を呈するもので、長径約38㎝、短径約27㎝、深さ28㎝を測る。中央よりやや南側に径約13㎝の柱痕跡をもつ。埋土は灰黄褐色シルト（10ＹR4/2）である。出土遺物は土師器小片１点、縄文土器片２点（２）がある。（２）は磨滅が著しいが、外面に縄文を施し、太い沈線で曲線文を描く。どのような文様を構成するかは不明である。黒褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。縄文時代後期のものと思われる。

21－ＯＰ　（第６・14図）

17－ＯＰ南側のＧ25ＷＪ地区で検出した。平面形はほぼ円形を呈し、径約29㎝、深さ37㎝である。中央部に径約16㎝の柱痕跡をもつ。埋土はにぶい黄褐色シルト（10ＹR4/3）である。遺物は出土しなかった。

22－ＯＰ　（第６・14図、図版４）

21－ＯＰ東側に位置するピットである。北東部分の約半分をトレンチによって切られて



第14図　3・11・18・21・22・54－OP平面・断面図

いるが、平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。径約36㎝、深さ15㎝で、中央部に径約18㎝の柱痕跡をもつ。埋土はにぶい黄褐色シルト（10ＹR4/3）である。遺物は認められなかった。

54－ＯＰ　（第６・14図）

５－ＯＰ西側のＧ25ＵＬ地区に位置する。平面形は不定形な楕円形を呈し、長径約37㎝、短径約30㎝、深さ28㎝である。中央部に径約16㎝の柱痕跡をもつ。埋土はオリーブ褐色シルト（2.5Y4/4）である。出土遺物は縄文土器と思われるものが２点とサヌカイトの剝片が１点出土した。土器は内外面共に磨滅のため図化できなかった。

87－ＯＰ　（第６図）

調査区北端のＫ05ＡＨ地区に位置する。トレンチによって東側を切られているが、平面形はほぼ円形を呈し、直径約47㎝、深さ13㎝を測る。出土遺物は縄文土器と思われるものが多く出土したがいずれも細片である上、磨滅が著しいため図化できなかった。

溝　（ＯＳ）

14－ＯＳ　（第６図）

調査区南側のＧ25ＷＪ・ＷＫ地区にまたがって検出した。東西方向に延びるもので、西側をＬ字状に屈曲させる。幅約20㎝、深さ4㎝前後で埋土は灰黄褐色シルト（10ＹR4/2）である。出土遺物は認められなかった。

79－ＯＳ　（第６図）

Ｇ25ＷＩ地区に位置する。東西方向のもので、東側を撹乱で切られ、西側は37－ＯＰによって切られている。現存長82㎝、幅28㎝、深さ18㎝前後を測る。出土遺物は認められなかった。

不明遺構　（ＯＸ）

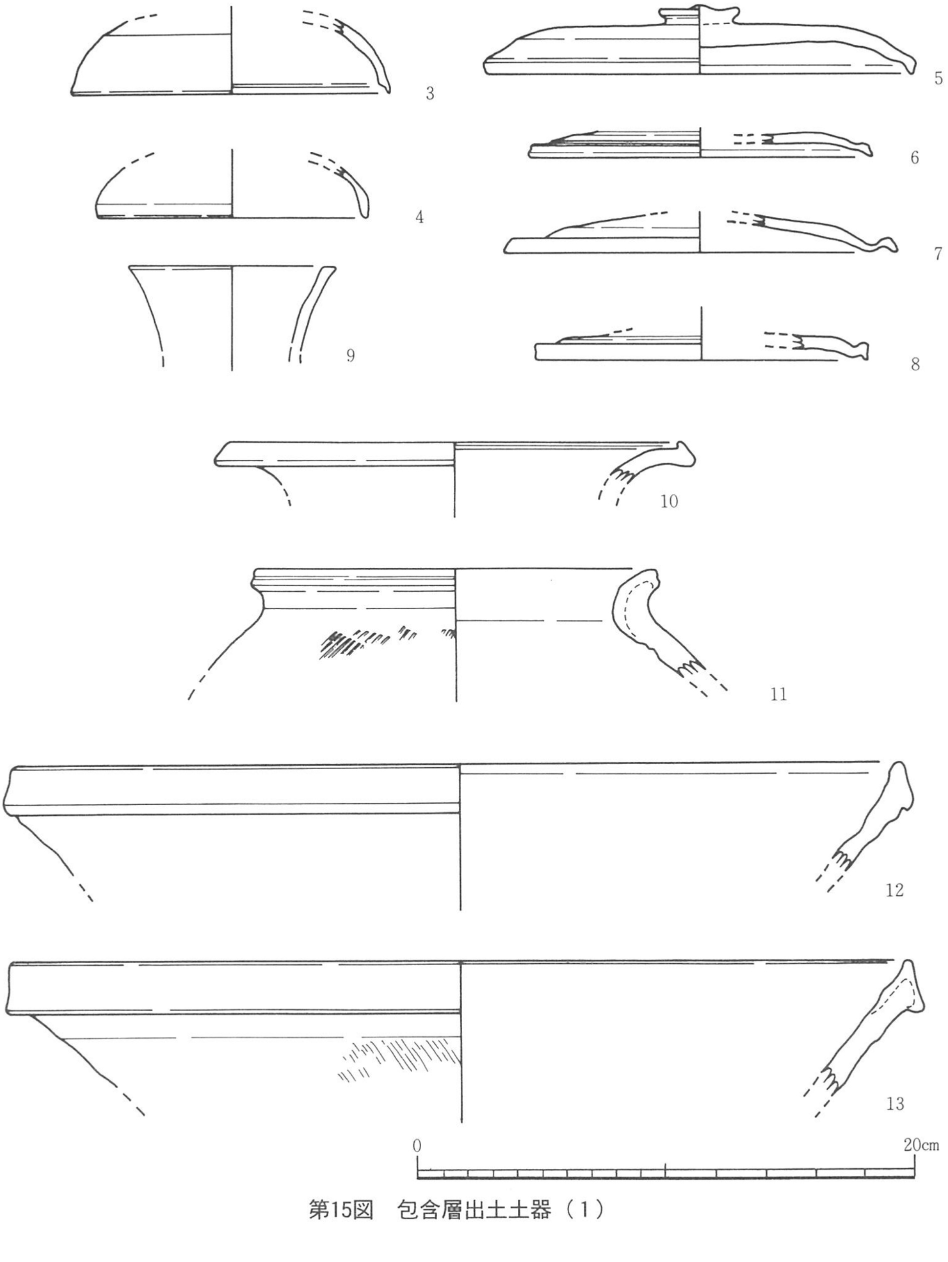
88・89－ＯＸ　（第６図）

調査区中央部のＧ25ＶＩ地区で検出した。２つの土坑は不定形な楕円形で、向い合うようにして位置し、やや内湾して弧状になった平面形を呈する。88－ＯＸは長辺約2.7m、深さ55㎝で、埋土は褐灰色シルト（５ＹR5/1）である。89－ＯＸは西側をトレンチによって切られて全容は不明であるが、長辺約3.3m、深さ26㎝を測り、埋土は黄灰色シルト（10ＹR6/1）である。今回検出したこれらの土坑は、木の残片が少量出土したことや、底よ

り更に内側に入り込むピット状の凹凸が多く認められることから、樹木の根の痕である可能性が高いと考えられる。なお、遺物は出土しなかった。

第２項　包含層出土遺物　（第７・15・16・17・18図、図版６・16・17）

今回の調査において確認した土層は、整地層（盛土）を除くと、最終遺構面に達するま



第15図　包含層出土土器（１）

でに基本的に10層に分層される。２～４層は耕作土である。５～８層内では、旧耕作面と思われる面を２面検出した。９・10層は灰色系の粘土層で、遺物をあまり含まない。各層は比較的水平な堆積であるが、南東方向から北西方向に向って、若干の傾斜が見られる。

包含層の遺物としては、第５層内より多くの遺物が出土した。他の層からの遺物出土量は少なく、いずれも磨滅が著しく図化できるものは少なかった。

第５層内より出土した遺物の内容は、須恵器の杯蓋（３・４)、蓋（５～８)、壺（９・10)、甕（11)、須恵質鉢（12・13)、瓦器碗（25～33)、瓦器皿（15～24)、土師器皿（34)、土師質甕（35・36)、土師質羽釜（37・38)、瓦質羽釜（39・40)、施釉陶器（14)、石製品（41～43）などがある。以下に図化し得たものを示す。

（３・４）は須恵器杯蓋である。復元口径12.8㎝、10.8㎝を夫々測る。内外面の調整は磨滅が著しく不明である。胎土は密で、白灰色の砂粒を多く含む。

（５～８）は須恵器の蓋である。（５）は復元口径17.6㎝、器高2.7㎝を測る。口縁部は、外下方に内湾気味に下り、端部は丸く収める。天井部中央に径約3.2㎝の貼り付け宝珠つまみをもつ。（６）は復元口径14㎝を測る。口縁部は、外下方に下るものである。（７）は復元口径16㎝を測り、口縁部は短く外反して下り、端部先端は丸い。（８）は復元口径13.5㎝を測り、口縁部はやや内湾気味に下るものである。

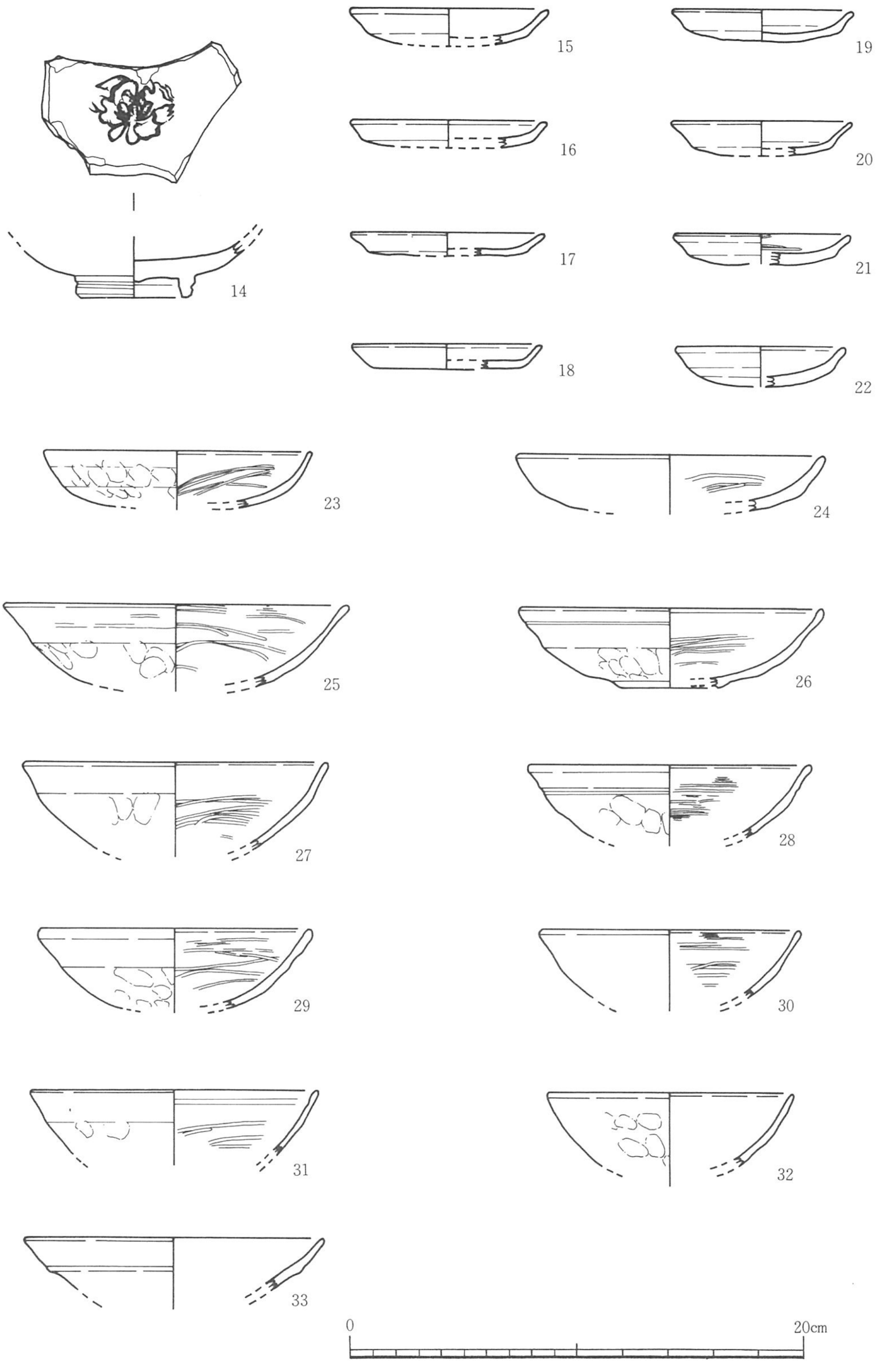
（９・10）は須恵器壺の口縁部である。（９）は復元口径8.4㎝で、口縁部は外湾し端部に平坦面をもつ。（10）は復元口径19.4㎝である。口縁部は外湾し端部は丸い。

（11）は須恵器甕の口縁部で、復元口径16.4㎝を測る。

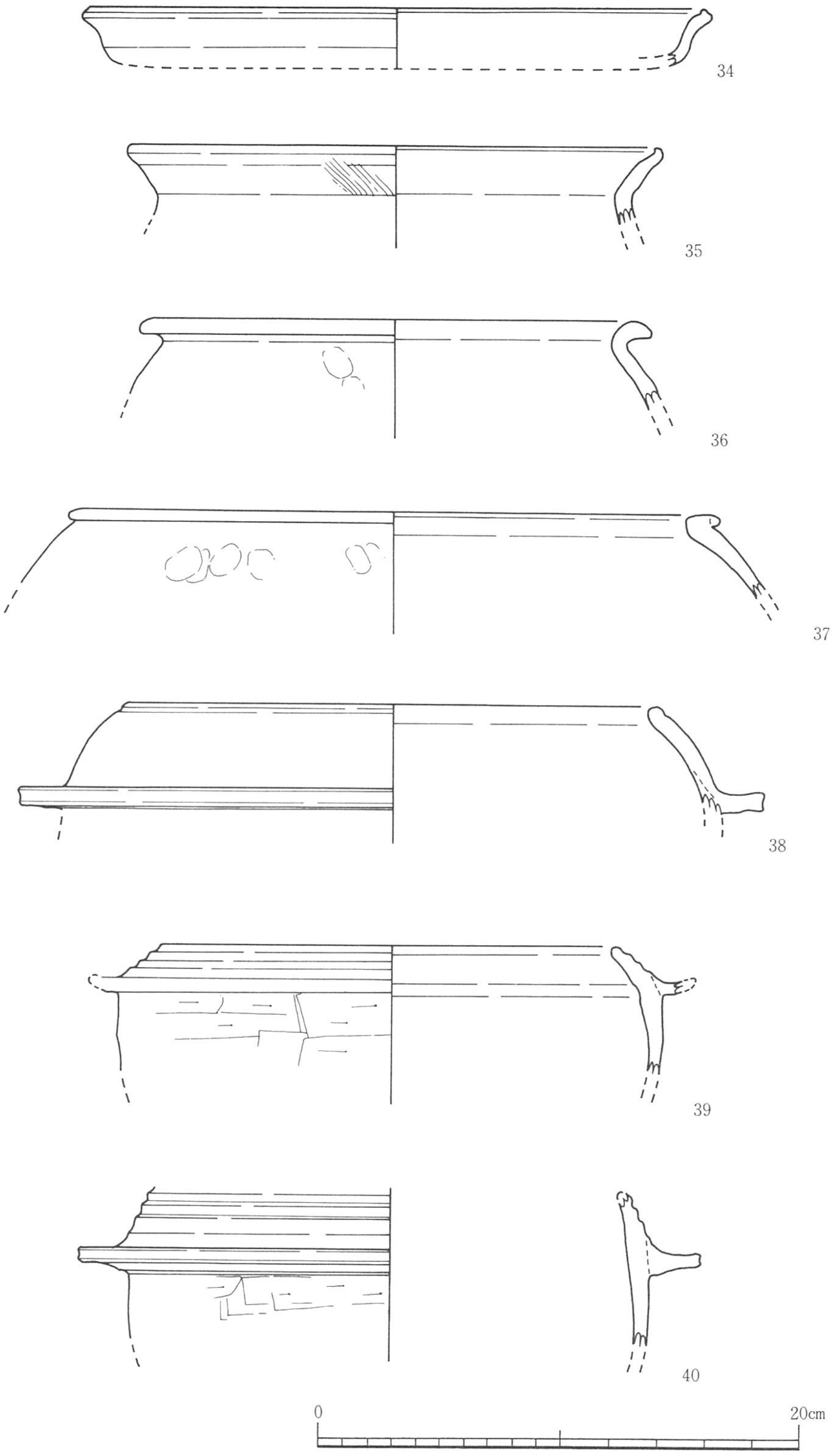
（12・13）は須恵質の鉢である。復元口径35.6㎝、36.2㎝を夫々測る。

（14）は青磁碗の底部である。高台径5.1㎝を測り、磁胎は精良である。内面見込みに印花文をもつ。釉はオリーブ灰色（2.5ＧＹ5/1）を呈し、高台外側面まで施釉し、高台端面より内面は露胎である。胎土は緻密で、色調は灰白色（Ｎ7/0）を呈している。

（15～24）は瓦器皿である。（15～18）は復元口径8.6㎝前後を測る。比較的平坦な底部から屈曲し、外反して短く開く口縁部を有する。端部は丸く収めている。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデ調整と指頭圧痕の調整が見られる。（19～22）は口径８㎝前後、器高1.5㎝前後を測る。丸い底部から、外反して開く口縁部を有し、端部は丸く収められている。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデ調整である。（19・20）には外部外面に指頭圧痕の調整がみられる。また、（21）には内面に横方向の粗雑なヘラミガキが残る。（23・24）は復元口径11.8㎝、13.6㎝を夫々測る。口縁部内外面はヨコナデ調



第16図　包含層出土土器（２）



第17図　包含層出土土器（3）

整で、端部は丸く収められている。内面には横方向のヘラミガキが残る。また、（23）の外面には２段の指頭圧痕が認められる。色調は淡黄色（2.5Y8/3）である。

（25・33）は瓦器碗である。（26）以外は高台がすべて欠損しているため、器高は不明である。（25）は復元口径15.2㎝を測る。外面には指頭圧痕が残り、内面には横方向のヘラミガキが認められる。（26）は復元口径13.6㎝、器高3.5㎝を測る。口縁部内外面にはヨコナデ調整で、端部は丸く収められている。外面には３段の指頭圧痕が認められ、内面には横方向のヘラミガキが残る。粘土紐で高台を貼り付けている。（27～31）は復元口径11.6～13.6㎝で、底部を欠損するため器高は不明である。口縁部内外面はヨコナデ調整、端部は丸く終える。体部外面には指頭圧痕が残り、内面には横方向のヘラミガキが認められる。（32・33）は内外面とも磨滅のため調整は不明であるが、口縁部内外面にはヨコナデ調整で端部は丸く終える。（32）には体部外面に指頭圧痕が認められる。

（34）は土師器皿の口縁部である。復元口径26.2㎝、残存器高2.3㎝を測る。口縁部はやや外湾し、口縁端部は丸く終える。内外面とも磨滅のため調整は不明である。色調はにぶい橙色（５ＹＲ7/3）である。胎土には２㎜前後の白色砂粒を多く含む。

（35・36）は土師質甕の口縁部である。（35）は復元口径22.2㎝を測るやや小形の甕である。頸部から外反して開く口縁部をもつ。口縁端部はやや内側に弱く巻き込む。口縁部外面はヨコナデ、頸部外面はタテハケ調整を施す。内面は磨滅のため調整は不明である。色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ7/3）で、胎土には1㎜前後の白色砂粒を多く含む。（36）は復元口径21.3㎝を測る。やや肥厚する口縁部を短く外反させて口縁部をつくる。口縁部内外面はヨコナデ調整で、口縁端部は丸く終える。内面は磨滅のため調整は不明である。色調はにぶい橙色（7.5ＹＲ7/4）で、胎土中には2㎜前後の灰色の砂粒を多く含む。

（37・38）は土師質の羽釜である。（37）は肥厚する口縁部を短く外反させ口縁部をつくる。口縁端部は丸く終り、水平の面をつくる。復元口径は27㎝を測る。調整は磨滅のために内外面とも不明である。色調は浅黄橙色（10ＹＲ8/3）で、胎土には4㎜前後の白色砂を含む。（38）は復元口径21.8㎝を測る。内湾する口縁部をもち、口縁端部は丸味をもって終る。鍔は短く水平に延びる。鍔から口縁部端部まではヨコナデ、内面はナデ調整を施す。色調は浅黄橙色（10ＹＲ8/3）で、胎土には2㎜前後の白色砂粒を多く含む。

（39・40）は瓦質の羽釜である。（39）は復元口径19.2㎝を測り、内湾する短い口縁部をもち、口縁端部は丸く終る。口縁部の高さは1.5㎝で３条の段を巡らせる。鍔より下側の外面は右方向のヘラケズリ、内面口縁部以下は板ナデ調整で仕上げられる。鍔より口縁

部まではヨコナデ調整を施す。色調は黄灰色（2.5Y4/1）で、胎土には白色の砂粒を多く含む。（40）はやや内湾する口縁部をもつ。復元口径19.6㎝、鍔径25.8㎝を測る。口縁部の高さは2.5㎝で３条の段を巡らせる。鍔より下側の外面は右方向のヘラケズリで、内面の口縁部以下は板ナデ調整で仕上げられる。鍔より口縁部まではヨコナデで調整され、口縁部は丸く終る。色調は灰色（N4/0）で、胎土には白色の微砂粒を多く含む。

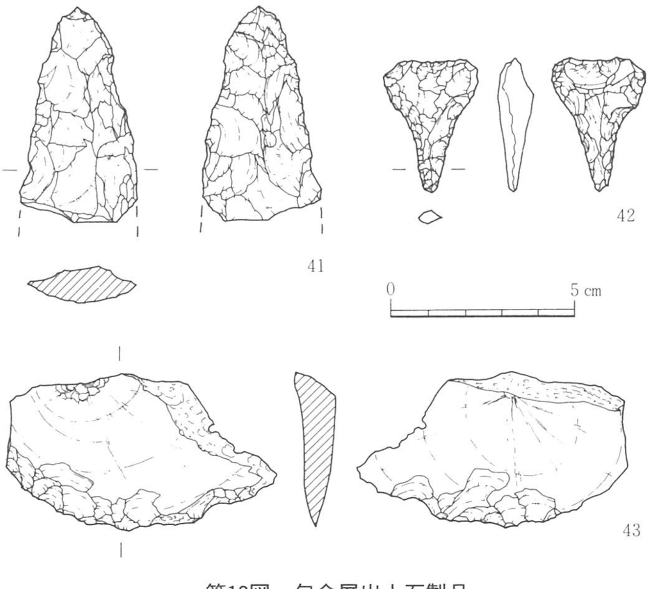
包含層出土石製品　（第18図、図版17）

今回の山ノ内遺跡の調査で検出した石器は以下の３点（41～43）である。他に剥片が若干量出土している。石製品はすべて第５層の包含層内よりの出土である。出土した石器・剥片はすべてサヌカイト製である。

（41）は石槍の未製品である。先端部のみの出土であるが弥生時代のものと思われる。折れは製作中に生じたと思われる。比較的丁寧な調整剥離を全面に加えている。刃の先端に刃潰痕が認められるのは２次的な使用によるものと思われる。残存器長5.8㎝、器幅3.2㎝、最大器厚0.95㎝、重さ18.7ｇを測る。

（42）は石錐の完成品である。比較的丁寧な調整剥離によって作られており、錐部と頭部とがはっきり区別できる。残存器長3.52㎝、頭部幅2.53㎝、重さ6.2ｇを測る。錐部の幅は0.6㎝で最大器厚は0.95㎝を夫々測る。錐部断面は菱形に近く、弥生時代のものと思われる。

（43）は上部に原礫面を残す不定形の横長剥片である。下部に粗い調整剥離を施す。長さ7.26㎝、幅4.22㎝、厚さ1.25㎝、重さ31.4gを測る。



第18図　包含層出土石製品

第１表　山ノ内遺跡ピット計測表

遺構番号	地区名	掘方径	柱根径	深さ	埋土	遺物
2－ＯＰ	G25－ＶＬ	67	18	4	(10ＹR4/2) 灰黄褐色シルト	
3－ＯＰ	G25－ＶＬ	48	10	32	(2.5Ｙ4/3) オリーブ褐色シルト	
4－ＯＰ	G25－ＶＬ	38	22	15	(10ＹR4/2) 灰黄褐色シルト	
5－ＯＰ	G25－ＵＬ	61	30	11	〃	
6－ＯＰ	G25－ＬＭ	71	17	29	〃	
7－ＯＰ	G25－ＵＫ	15	—	29	(10ＹR5/2) 灰黄褐色シルト	
8－ＯＰ	G25－ＴＪ	37	11	20	〃	
9－ＯＰ	G25－ＵＪ	21	12	15	〃	
10－ＯＰ	G25－ＵＪ	20	10	17	〃	
11－ＯＰ	G25－ＶＪ	39	26	48	(2.5Ｙ4/3) オリーブ褐色シルト	
12－ＯＰ	G25－ＷＫ	48	16	22	(10ＹR4/2) 灰黄褐色シルト	
13－ＯＰ	G25－ＷＫ	28	11	25	〃	
15－ＯＰ	G25－ＷＫ	85	—	24	〃	
16－ＯＰ	G25－ＷＪ	103	—	25	〃	弥生土器
17－ＯＰ	G25－ＷＪ	33	28	17	〃	
18－ＯＰ	G25－ＷＪ	38	14	34	(2.5Ｙ４／３) オリーブ褐色シルト	
19－ＯＰ	G25－ＷＪ	38	13	28	(10ＹR4/2) 灰黄褐色シルト	縄文土器、土師器
20－ＯＰ	G25－ＸＪ	22	9	26	〃	
21－ＯＰ	G25－ＷＪ	29	16	37	(10ＹR4/3) にぶい黄褐色シルト	
22－ＯＰ	G25－ＸＪ	36	18	15	〃	
23－ＯＰ	G25－ＸＪ	21	—	21	(10ＹR4/1) 褐灰色シルト	
24－ＯＰ	G25－ＳＨ	20	8	21	〃	
25－ＯＰ	G25－ＸＩ	17	—	31	〃	
26－ＯＰ	G25－ＷＩ	63	—	16	〃	
27－ＯＰ	G25－ＸＩ	23	12	28	〃	
28－ＯＰ	G25－ＸＩ	20	9	26	〃	
30－ＯＰ	G25－ＸＩ	18	9	9	〃	
31－ＯＰ	G25－ＸＩ	70	—	16	〃	
32－ＯＰ	G25－ＹＩ	24	—	24	(7.5ＹR5/1)褐灰色粘質シルト礫多く含む	
33－ＯＰ	G25－ＹＨ	31	18	10	〃	
34－ＯＰ	G25－ＹＨ	30	15	22	〃	
35－ＯＰ	G25－ＹＨ	35	28	25	〃	
36－ＯＰ	G25－ＸＨ	30	13	12	〃	
37－ＯＰ	G25－ＷＩ	26	—	18	〃	
38－ＯＰ	G25－ＷＩ	53	—	11	〃	
39－ＯＰ	G25－ＷＩ	56	—	9	〃	
40－ＯＰ	G25－ＶＩ	23	—	12	(10ＹR5/2) 灰黄褐色シルト	
42－ＯＰ	G25－ＷＨ	61	—	11	(7.5ＹR5/1) 褐灰色粘質シルト礫含む	
43－ＯＰ	G25－ＸＨ	40	—	17	〃	
45－ＯＰ	G25－ＸＧ	26	5	25	〃	
46－ＯＰ	G25－ＷＧ	29	—	8	〃	
47－ＯＰ	G25－ＷＧ	37	18	17	〃	
48－ＯＰ	G25－ＸＧ	16	—	7	〃	
49－ＯＰ	G25－ＸＧ	38	—	5	〃	
50－ＯＰ	G25－ＶＧ	27	—	12	〃	
51－ＯＰ	G25－ＶＨ	57	—	19	〃	
52－ＯＰ	G25－ＷＨ	21	—	6	〃	
53－ＯＰ	G25－ＶＨ	60	15	24	〃	
54－ＯＰ	G25－ＵＬ	37	16	28	(2.5Ｙ4/4) オリーブ褐色シルト	縄文土器、サヌカイト
55－ＯＰ	G25－ＴＩ	20	8	19	(7.5ＹR7/1) 明褐灰色シルト	
56－ＯＰ	G25－ＴＨ	23	—	8	〃	
57－ＯＰ	G25－ＴＨ	21	—	12	〃	
58－ＯＰ	G25－ＳＨ	20	13	16	〃	
59－ＯＰ	G25－ＳＨ	22	12	16	〃	
60－ＯＰ	G25－ＳＧ	20	9	11	(10ＹR6/1) 褐灰色シルト	
61－ＯＰ	G25－ＴＨ	44	20	13	〃	
62－ＯＰ	G25－ＴＧ	45	17	10	〃	
63－ＯＰ	G25－ＴＧ	37	—	11	〃	
64－ＯＰ	G25－ＵＧ	56	—	8	〃	
65－ＯＰ	G25－ＵＧ	25	—	7	〃	
67－ＯＰ	G25－ＵＦ	31	12	22	〃	
68－ＯＰ	G25－ＸＪ	60	—	9	(10ＹR4/1) 褐灰色シルト	
70－ＯＰ	G25－ＳＨ	76	—	10	(10ＹR6/1) 褐灰色シルト	
71－ＯＰ	G25－ＶＪ	20	11	36	(10ＹR4/2) 灰黄褐色シルト	
72－ＯＰ	G25－ＶＪ	21	11	25	〃	
73－ＯＰ	G25－ＶＧ	22	—	5	(10ＹR6/1) 褐灰色シルト礫ふくむ	
74－ＯＰ	G25－ＶＦ	65	—	15	〃	
77－ＯＰ	G25－ＸＪ	60	—	18	(10ＹR4/1) 褐灰色シルト	
78－ＯＰ	G25－ＷＩ	16	—	6	(7.5ＹR5/1) 褐灰色シルト	
80－ＯＰ	G25－ＷＩ	22	—	5	〃	
81－ＯＰ	K05－ＡＨ	53	—	8	〃	
82－ＯＰ	G25－ＸＨ	78	18	33	(7.5YR5/1) 褐灰色粘質シルト礫含む	
83－ＯＰ	G25－ＴＩ	34	17	28	〃	
84－ＯＰ	G25－ＶＪ	21	9	11	(10ＹR5/2) 灰黄褐色シルト	
85－ＯＰ	G25－ＵＥ	54	29	14	(10ＹR6/1) 褐灰色シルト	
86－ＯＰ	G25－ＳＨ	21	—	10	(7.5ＹR7/1) 明褐灰色シルト	
87－ＯＰ	K05－ＡＨ	47	—	13	〃	縄文土器、サヌカイト

凡例：「地区名」は代表地区名、「掘方径」「柱根径」「深さ」の単位は㎝。

第３節　山直北遺跡の調査

山直北遺跡の調査は、当協会が昭和61年に実施している。今回の調査地は、岸和田市三田町に所在し、前回調査地の未調査部分（535㎡）について行った。調査地の地目は水田及び宅地であった。

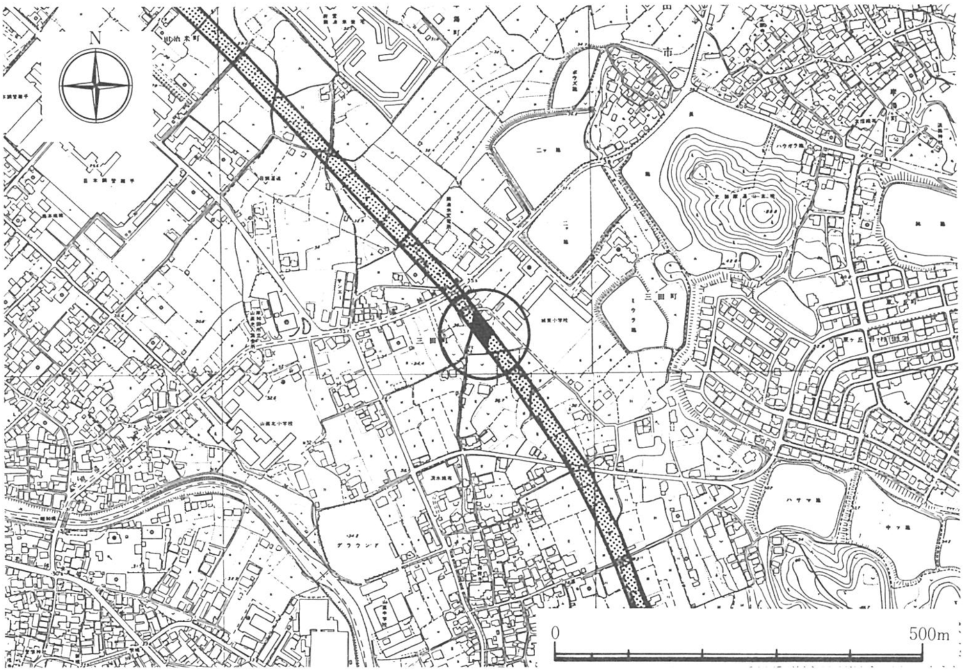
第１項　検出遺構と遺物

今回の調査区で検出された遺構はピット・土坑・溝などである。いずれの遺構も中～近世の削平を受けており、遺構の残存状態は悪かった。

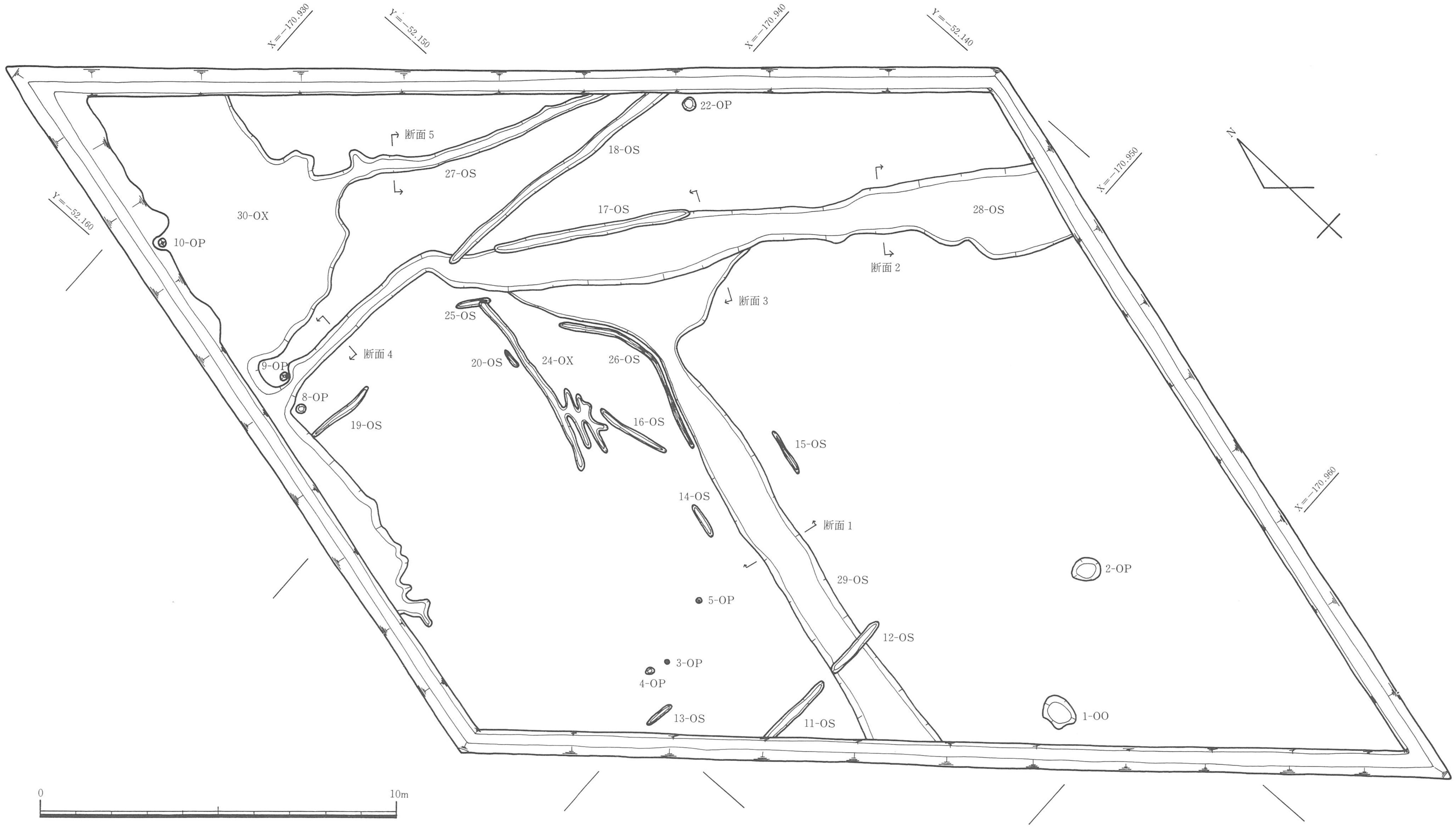
土坑　（ＯＯ）

１－ＯＯ　（第20図）

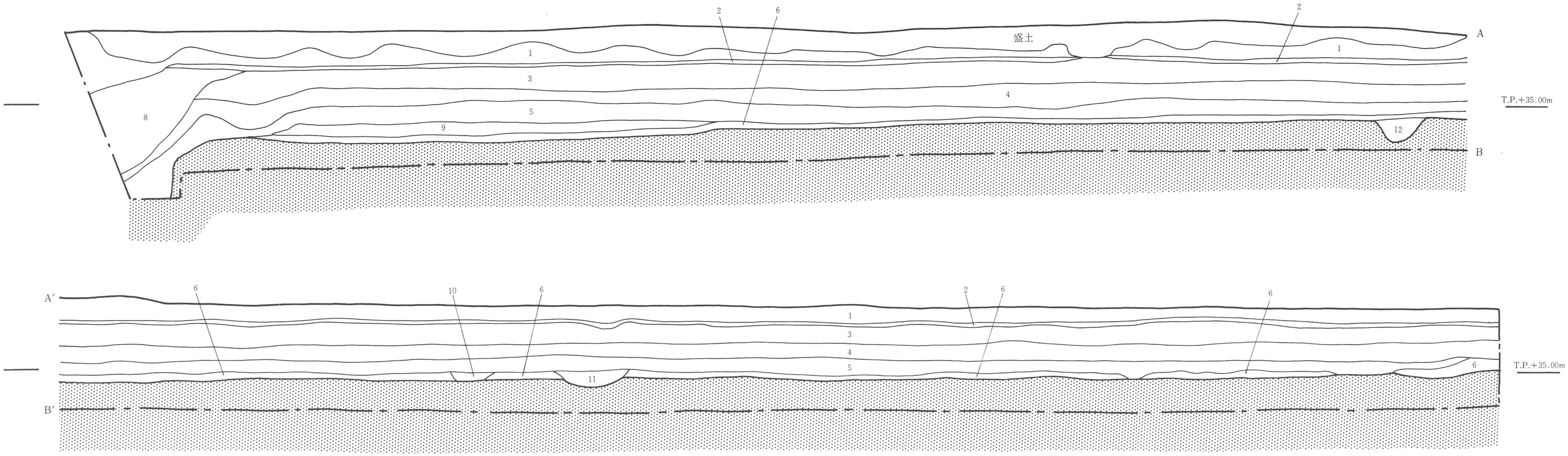
調査区南側のＬ24ＯＬ・ＯＭ地区に位置する土坑である。平面形は不定形な円形を呈し、径約98㎝、深さ20㎝である。埋土は灰白色シルト（2.5Ｙ7/1）である。遺物は出土しなかった。

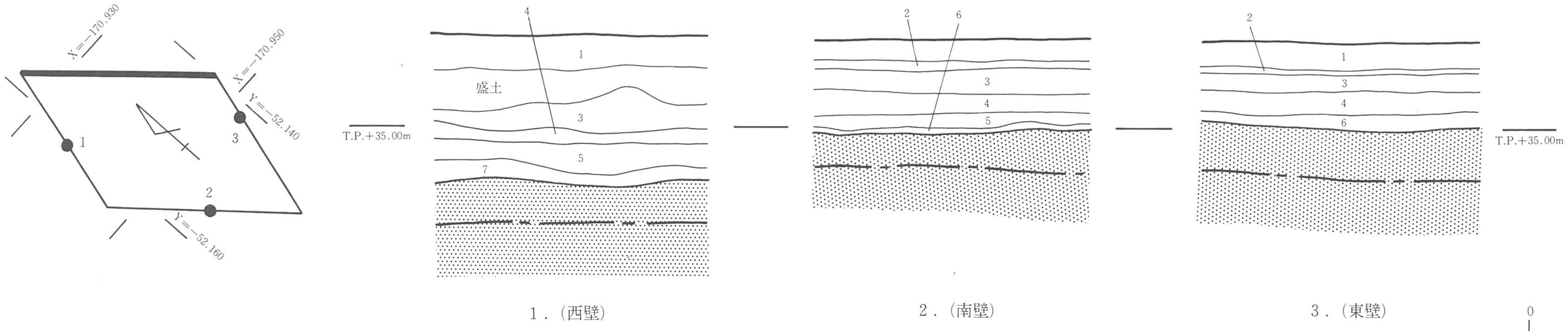


第19図　山直北遺跡調査地位置図

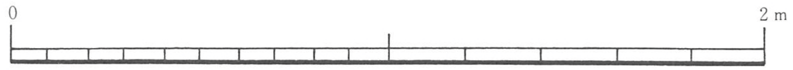


第20図　山直北遺跡遺構配置図





1．5Y　 3/2 オリーブ黒色砂質シルト（現代耕土）
2．10YR 5/8 黄褐色砂質シルト
3．7.5Y 6/1 灰色シルト
4．7.5Y 7/1 灰白色シルト
5．2.5Y 6/2 灰黄色シルト
6．10YR 5/8 黄褐色シルト
7．7.5Y 7/2 灰白色シルト質粘土
8．10Y　 7/1 灰白色シルト質粘土
9．7.5YR7/1 明褐灰色シルト
10．2.5Y 7/1 灰白色シルト（27-OS）
11．2.5Y 7/1 灰白色シルト（18-OS）
12．2.5Y 6/2 灰黄色砂層



第21図　山直北遺跡北壁土層断面及び西・南・東壁土層断面柱状図

ピット　（ＯＰ）

２－ＯＰ　（第20図）

調査区東側のＬ24ＯＭ地区に位置する。平面形は不定形な円形を呈し、長径約61㎝、深さ13㎝を測る。埋土は明褐灰色弱粘質土（7.5ＹＲ7/1）である。出土遺物は瓦器碗の小片が出土した。いずれも磨滅が著しく図化できなかった。

３－ＯＰ　（第20図）

４－ＯＰ東側のＬ24ＭＫ地区において検出した円形のピットである。径約11㎝、深さ7㎝を測る。埋土は灰白色シルト（2.5Ｙ7/1）である。遺物は出土しなかった。

４－ＯＰ　（第20図）

調査区西側のＬ24ＭＫ地区において検出した。平面形はほぼ円形を呈し、径約24㎝、深さ26㎝を測る。埋土は褐灰色シルト（7.5ＹＲ5/1）である。遺物としてはサヌカイトの剥片が１点出土した。

５－ＯＰ　（第20図）

調査区西側のＬ24ＭＫ地区において検出した。ほぼ円形を呈し、径約15㎝、深さ10㎝を測る。埋土は明褐灰色シルト（7.5ＹＲ7/1）である。遺物は出土しなかった。

８－ＯＰ　（第20図）

調査区西側Ｌ24ＪＫ地区に位置する。径約25㎝、深さ6㎝の円形ピットである。埋土は明褐灰色シルト（7.5ＹＲ7/1）である。出土遺物は須恵器片が１点出土したが、小片のため図化できなかった。

９－ＯＰ　（第20図）

調査区北西のＬ24ＪＫ地区に位置するピットである。平面形はほぼ円形を呈し、径約25㎝、深さ7㎝を測る。埋土は褐灰色シルト（7.5Ｙ6/1）である。遺物は出土しなかった。

10－ＯＰ　（第20図）

調査区北西のＬ24ＨＫ地区に位置するピットである。平面形はほぼ円形を呈し、径約20㎝、深さ11㎝を測る。埋土は明褐灰色シルトである。このピットはおそらく27－ＯＳが埋没した後に、掘削されたピットと思われる。遺物は出土しなかった。

22－ＯＰ　（第20図）

調査区北側のＬ25ＪＮ地区に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、径約37㎝、深さ8㎝を測る。埋土は明褐灰色シルト（7.5Ｙ7/1）である。遺物は出土しなかった。

溝　（ＯＳ）

11－ＯＳ　（第20図）

Ｌ24ＮＫ地区に位置する。東西方向の溝で、西側を側溝によって切られている。調査区内検出長約2.1m、幅約26㎝、深さ6㎝前後を測る。埋土は灰白色シルト（2.5Ｙ7/1）である。遺物は出土しなかった。

12－ＯＳ　（第20図）

11－ＯＳ東側のＬ24ＮＬ地区に位置する。27－ＯＳを切って作られており、長さ約1.8m、幅約21㎝、深さ５㎝前後を測る。埋土は灰白色シルト（2.5Ｙ7/1）である。遺物は出土しなかった。

13－ＯＳ　（第20図）

調査区西側のＬ24ＭＫ地区に位置する。長さ84㎝、幅19㎝、深さ4㎝前後の溝で東西方向のものである。埋土は灰白色シルト（2.5Ｙ7/1）である。遺物は出土しなかった。

14－ＯＳ　（第20図）

調査区のほぼ中央部で、Ｌ24ＬＬ・ＭＬ地区の２区にまたがって位置する南北方向の溝である。長さ約1m、幅約20㎝、深さ3㎝前後を測る。埋土は灰白色シルト（2.5Ｙ7/1）で遺物は確認されなかった。

15－ＯＳ　（第20図）

調査区中央部のＬ24ＬＭ・ＭＭ地区に位置する南北方向の溝で長さ約1.3m、幅約13㎝、深さ4㎝前後を測る。埋土は灰白色シルト（2.5Ｙ7/1）である。遺物は出土しなかった。

16－ＯＳ　（第20図）

24－ＯＸの東側のＬ24ＫＬ・ＬＬ地区に位置する。溝は北西から東北方向のもので、長さは約2.1m、幅約18㎝、深さ2㎝前後を測る。埋土は灰白色シルト（2.5Ｙ7/1）である。遺物は確認されなかった。

17－ＯＳ　（第20図）

調査区北側のＬ24ＪＬ・ＪＭ・ＫＭ地区に位置する溝である。北西から南東方向のもので、28－ＯＳ北側の肩を切って作られている。検出長約5.5m、幅約30㎝、深さ5㎝前後を測る。埋土は灰白色シルト（2.5Ｙ7/1）である。遺物は出土しなかった。

18－ＯＳ　（第20図）

17－ＯＳ北側のＬ24ＪＬ・JM・JN地区にまたがって検出した。溝は東西方向のもので、東側を調査区外に延ばし、西側は28－ＯＳを切って作られている。検出長約7.6m、幅24

～36㎝、深さ8㎝前後を測る。埋土は灰白色シルト（2.5Y7/1）である。出土遺物は須恵器片13点、土師器片９点があるが、いずれも小片で図化できなかった。

19－ＯＳ　（第20図）

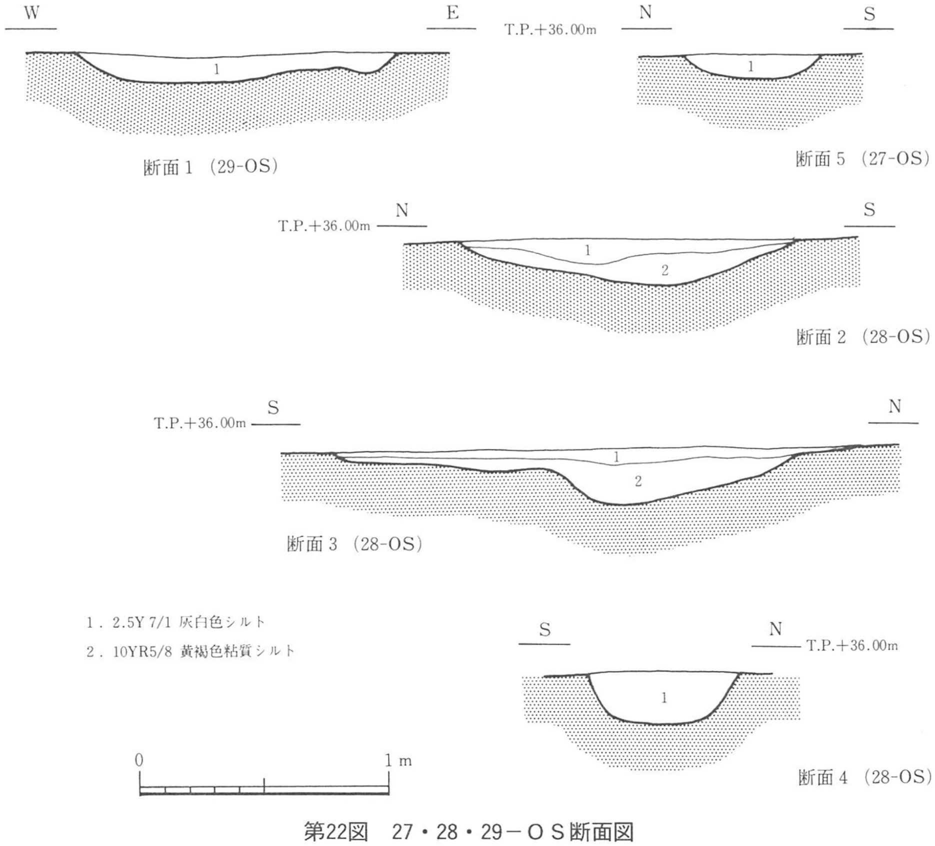
調査区西側のＬ24ＪＫ地区に位置する。東西方向の溝で、長さ約２m、幅約23㎝、深さ5㎝前後を測る。埋土は明褐灰色シルト（7.5ＹR7/1）である。遺物は土師器片１点が出土した。小片のため図化できなかった。

20－ＯＳ　（第20図）

調査区西側のＬ24ＫＬ地区において検出した。南北方向に走る溝で、長さ約59㎝、幅約10㎝、深さ3㎝前後を測る。埋土は灰白色シルト（2.5Ｙ７/1）である。出土遺物はサヌカイトの剝片を一点出土した。

25－OS　（第20図）

Ｌ24ＪＬ地区に位置する。24－ＯＸを切って作られており、長さ約94㎝、幅約17㎝、深



第22図　27・28・29－ＯＳ断面図

さ６㎝前後を測る。溝は北西から南東方向のものである。埋土は灰白色シルト（2.5Y7/1）である。出土遺物としては須恵器片２点、土師器片２点がある。いずれも小片で図化できなかった。

26－ＯＳ　（第20図）

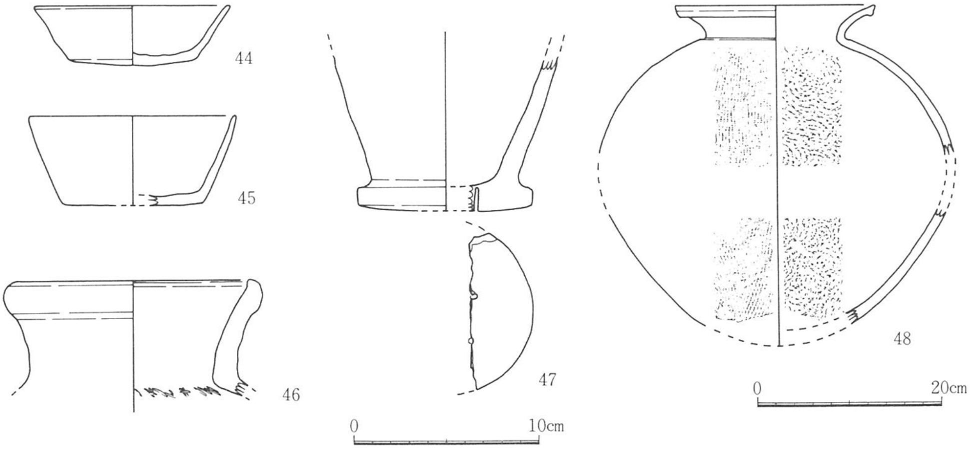
調査区のほぼ中央部Ｌ24ＫＬ・ＬＬ地区に位置する。南北方向に走る溝で、北側をＬ字状に屈曲させる。調査区内検出長約4.5m、幅６～21㎝、深さ5㎝前後を測る。溝の南側は29－ＯＳを切って作られている。埋土は明褐灰色シルト（7.5ＹＲ7/1）である。遺物は出土しなかった。

27－ＯＳ　（第20・22図、図版７）

調査区北西のＬ24ＩＬ・ＩＭ・ＪＭ・ＪＮ地区にまたがって検出した溝である。東西方向のもので、東側を調査区外に延ばし、西側は30－ＯＸに注ぎ込んでいるようである。調査区内検出長約8.9m、幅約38㎝、深さ8㎝前後を測る。埋土は灰白色土（2.5Y7/1）である。出土遺物としては須恵器片45点、土師器片118点、瓦器片１点などがある。いずれも小片で磨滅が著しく図化できなかった。

28－ＯＳ　（第20・22図、図版７・18）

調査区北側のＬ24ＪＫ・ＪＬ・ＫＬ・ＫＭ・ＫＮ・ＬＮ・ＬＯ・ＭＯ地区にまたがって位置する。北西から南東方向のもので、西端を調査区外に延ばす。調査区内検出長約24m、幅60㎝～2.5m、深さ10～20㎝を測る。埋土は２層に分かれ、上層は灰白色シルト（2.5Ｙ7/1）層で、下層は黄褐色シルト（10ＹＲ5/8）層である。出土遺物としては須恵器片86点（44～48）、土師器片84点、瓦器碗片９点がある。土師器片、瓦器碗片はいずれも小片で



第23図　28－ＯＳ出土土器

磨滅が著しいため図化できなかった。（44・45）は須恵器の杯である。（44）は復元口径10.5㎝、器高3.2㎝を測る。調整は磨滅のため不明で、色調は灰色（N4/0）を呈する。（45）は復元口径11.2㎝、器高4.8㎝である。外面の調整はヘラケズリ、内面はナデ調整である。色調は灰色（N6/0）である。（46）は須恵器壺の口縁部で、復元口径12.6㎝を測る。色調は灰色（N6/0）である。（47）は捏鉢の底部である。残存高8.3㎝、底径9.4㎝を測る。底部は外側に短く張り出した後、内傾し丸底に近い平底となる。底部には2ヶ所の円孔がみられる。色調は灰白色（N7/0）である。（48）は須恵器の壺である。復元口径12.2㎝、残存高34.5㎝を測る。外面は平行叩き、内面は同心円叩きを全面に施している。焼成は良好で硬質である。色調は灰色（10Y6/1）である。

29－OS　（第20・22図、図版7）

調査区中央部のL24KL・KM・LL・LM・ML・NK・NL・OL地区にまたがって検出した溝である。南北方向のもので、南側を調査区外に延ばし、北側は28－OSに注ぎ込んでいる。調査区内検出長約15m、幅約1.5m、深さ5～15㎝を測る。溝は南側が北側に比べると若干深くなっており、北から南に流れるものと思われる。埋土は灰白色シルト（2.5Y7/1）である。出土遺物としては須恵器片39点、土師器片48点、瓦質土器片3点などがある。いずれも小片であるため図化できなかった。

不明遺構　（OX）

24－OX　（第20図）

調査区のほぼ中央部L24JL・KL・LL地区に位置する。南北方向に走る溝状の遺構で、最大長約5m、最小長約1.8m、幅約20㎝、深さ3㎝前後である。埋土は灰白色シルト（2.5Y7/1）である。おそらく鋤溝（OZ）ではないかと思われる。遺物は土師器の細片が3点出土した。いずれも磨滅が著しく図化できなかった。

30－OX　（第20図）

調査区西側のL24GK・GL・HJ・HK・HL・IJ・IK・IL・JJ・JK・KJ地区に位置する。遺構は調査区外に延びており、その全容は明らかでない。検出し得た部分の形状は不定形で、東西約5m、南北約13mを測り、底面には若干の凹凸が認められる。深さは東側から西側に向って徐々に傾斜しながら深くなっており、比高差は調査区内で計測しただけでも約65㎝あった。今回の調査では、調査区の関係上西側を拡張することができなかったため遺構の性格、規模などは不明である。埋土は明褐灰色土（7.5YR7/1）

である。出土遺物としては須恵器片及び土師器片が出土したが、いずれも磨滅しており図化はできなかった。

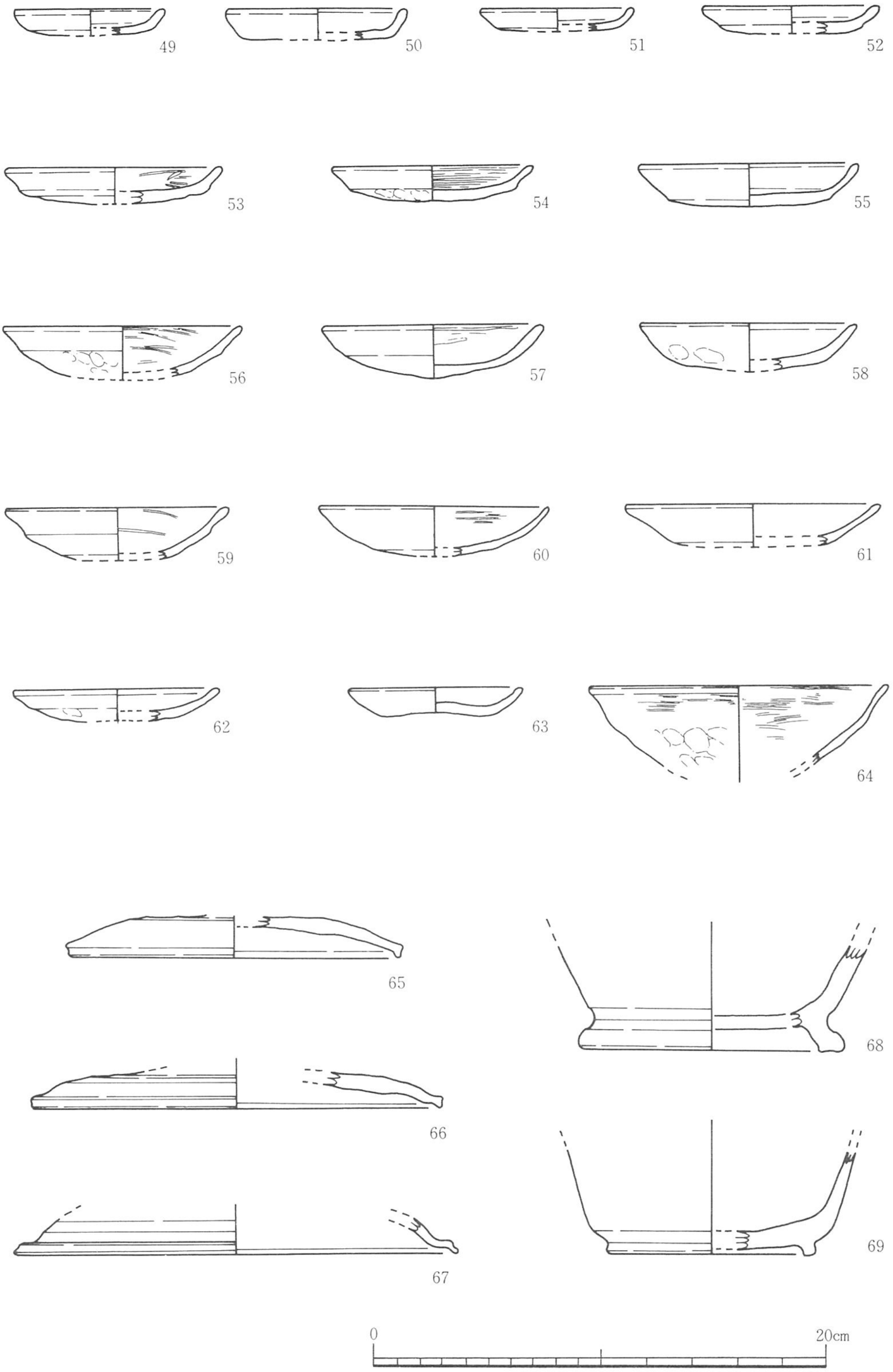
第2項　包含層出土遺物　（第21・24・25・26図、図版18・19）

今回の山直北遺跡の調査で確認した土層は、最終遺構面に達するまでに基本的に5層に分層される。第1層は現代耕作土とそれに伴う床土である。第2～5層は旧耕作土と整地層である。整地層及び旧耕作土は灰色系のシルト層で、微砂を多く含む。各層は比較的水平な堆積状況であったが、調査区の北西端で西側に傾斜する段を確認した。今回の調査では、調査区の関係上これ以上調査区を拡張することができなかったため、この傾斜の性格・規模などを確認することはできなかった。この傾斜は調査区の北西側を南北方向に走る水路の掘方か、微高地に伴う段状のようなものではないかと思われる。

遺物はおもに現代耕作土に伴う床土と第2層内よりの出土である。第3～5層には遺物はあまり含まれず、須恵器、土師器の磨滅した細片が少量出土しただけである。第2層より出土した遺物の内容は、須恵器の蓋（65～67)、須恵器の杯（69)、壺（68)、土師器の小皿（49～52)、瓦器皿（53～63)、瓦器碗（64)、須恵質鉢（72)、須恵質羽釜（71)、土師質羽釜（70)、石製品（73）などがある。いずれも残りが悪く、全体の出土量も多くなかった。以下に図化し得たものを示す。

（49～52）は土師器の小皿である。（49）は復元口径6.6㎝、器高1.2㎝を測る。やや内湾気味に開く口縁部をもち、口縁端部は丸く収めている。（50）は平坦な底部から屈曲して、外反する口縁部を有し、口縁端部は丸く終る。復元口径7.7㎝、器高1.4㎝を測る。（51）は復元口径6.8㎝、器高1㎝を測る。比較的平坦な底部から、やや内湾気味に開く口縁部をもつ。口縁端部は丸く収められている。（52）は平坦な底部から、やや内湾気味に開く口縁部を有する。復元口径7.8㎝、器高1.25㎝を測る。口縁端部は丸く収める。

（53～63）は瓦器皿である。（53）は復元口径9.4㎝、器高1.6㎝を測る。内面にはヘラミガキ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整で、口縁端部は丸く収めている。（54）は復元口径8.8㎝、器高1.4㎝を測る。　口縁部はやや外反し、口縁端部は丸く収めている。口縁部はヨコナデ、内面にはヘラミガキ調整を施す。外面には指頭圧痕が明瞭に観察される。（55）は平坦な底部から屈曲して、外反する口縁部を有する。復元口径9.6㎝、器高1.8㎝を測る。内外面とも磨滅のため調整は不明である。（56）はやや外反する口縁部を有し、口縁部は丸く収める。復元口径10.5㎝、器高22㎝を測る。口縁部外面はヨコナデ、内面は

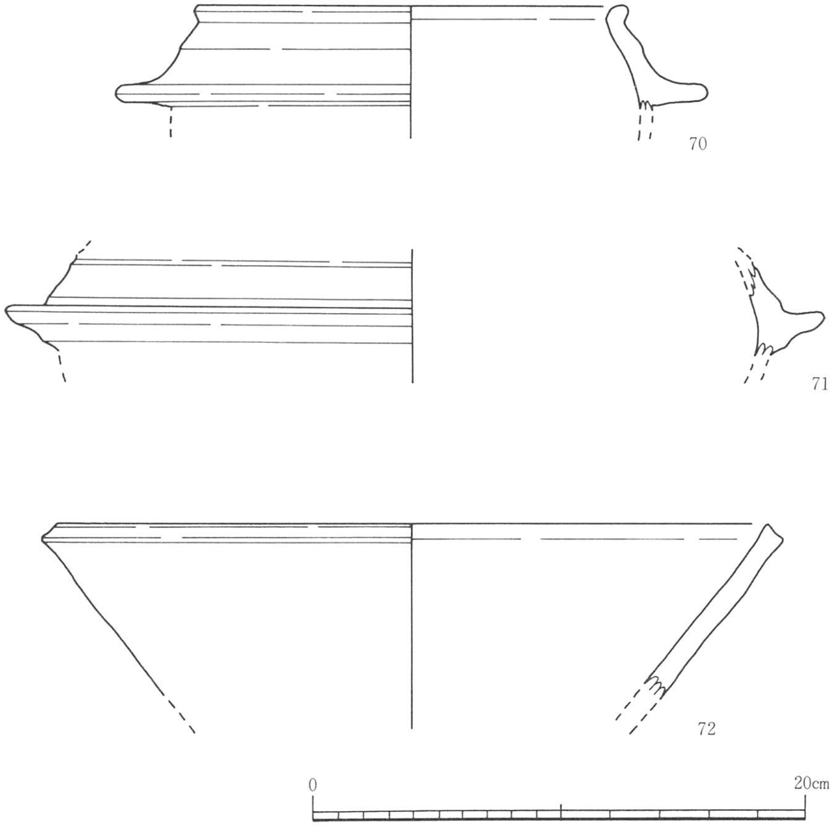


第24図　包含層出土土器（1）

ヘラミガキを施している。外面には指頭圧痕が明瞭に観察される。(56～60)は復元口径9.5～10㎝、器高2～2.3㎝を測る。丸く低い底部から屈曲し、やや外反して開く口縁部を有する。口縁部外面にはヨコナデ、内面にはヘラミガキを施している。不明瞭なものもあるが、外面に指頭圧痕が残る。(61)は復元口径11.3㎝、器高1.7㎝を測る。内外面とも磨滅のため調整は不明である。(62)は丸い底部から緩やかに外反して開く口縁部を有する。口縁端部は丸く、口縁部内外面共にナデ調整を施す。復元口径9.1㎝、器高1.4㎝を測る。(63)は復元口径7.6㎝、器高1.2㎝を測る。口縁端部は丸く、やや外湾する口縁部を有する。口縁部内外面ともヨコナデ調整を施している。

(64)は瓦器碗である。高台が欠損しているため、器高は不明であるが、復元口径13.2㎝を測る。口縁端部は丸く、口縁部はやや外反する。外面には2段の指頭圧痕が認められる。内面には横方向のヘラミガキが認められる。色調はオリーブ黒色(10Y3/1)である。

(65～67)は須恵器の蓋である。(65)は復元口径14.4㎝を測る。口縁部は外下方にや



第25図　包含層出土土器(2)

や内湾気味に下り、口縁端部は丸く収める。（66）は復元口径18.2㎝を測る。口縁部はやや厚く内湾気味に下る。（67）は復元口径19.4㎝で、口縁部は外下方に下るものである。

（68）は須恵器壺の底部である。低く安定感のある高台を付す。底径11.6㎝を測る。

（69）は須恵器杯の底部である。底部はほぼ平らで、底面周縁に短く外側に張り出す高台を付す。底径は4.5㎝である。色調は灰白色（5Y7/1）である。

（70）は土師質の羽釜である。復元口径17.6㎝、鍔径24㎝を測る。内湾する口縁部をもち、口縁部はやや外反し、口縁端部は丸く収めている。鍔より口縁部まではヨコナデ、内面口縁部以下は板ナデ調整で仕上げられている。色調は鈍い橙色（7.5YR7/3）である。

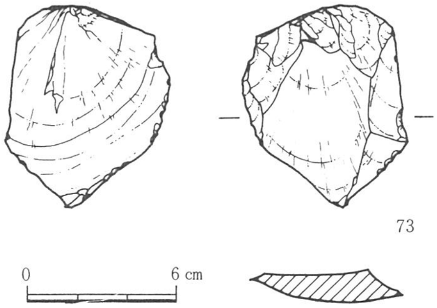
（71）は須恵質の羽釜である。口縁部が欠損しているため口径は不明である。やや内湾する短い鍔をもつ。鍔径33.2㎝を測る。鍔より上部はヨコナデ、内面は板ナデ調整で仕上げられている。色調は灰色（10Y5/1）である。

（72）は須恵質鉢の口縁部である。復元口径30㎝を測る。口縁端部に凹面を有する。

包含層出土石製品　（第26図、図版19）

今回の山直北遺跡の調査で検出した石器は以下の1点（73）である。他に剝片が7点出土しているが、出土遺物の総数量からみれば石器・剝片の出土量はわずかなものといえる。なお、出土した石器・剝片はいずれもサヌカイト製である。

（73）は弥生時代の不定形刃器と思われる。残存器長8.1㎝、器幅6.7㎝、最大器厚1.3㎝、重さ67.9ｇを測る。側面には調整の小剝離が見られる。



第26図　包含層出土石製品

第2表　山直北遺跡ピット計測表

遺構番号	地区名	掘方径	柱根径	深さ	埋土	遺物
2－OP	L24－OM	61	—	13	(7.5YR7/1) 明褐灰色弱粘質土	瓦器
3－OP	L24－MK	11	—	7	(2.5Y7/1) 灰白色シルト	
4－OP	L24－MK	24	—	26	(7.5YR5/1) 褐灰色シルト	サヌカイト
5－OP	L24－MK	15	—	10	(7.5YR7/1) 明褐灰色シルト	
8－OP	L24－JK	25	—	6	〃	須恵器
9－OP	L24－JK	25	—	7	(7.5Y6/1) 褐灰色シルト	
10－OP	L24－HK	20	—	11	(7.5YR7/1) 明褐灰色シルト	
22－OP	L24－JN	37	—	8	〃	

凡例：「地区名」は代表地区名、「掘方径」「柱根径」「深さ」の単位は㎝。

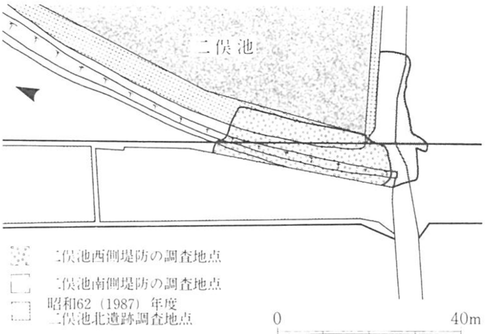
第４節　二俣池北遺跡の調査

第１項　二俣池西側堤防の調査

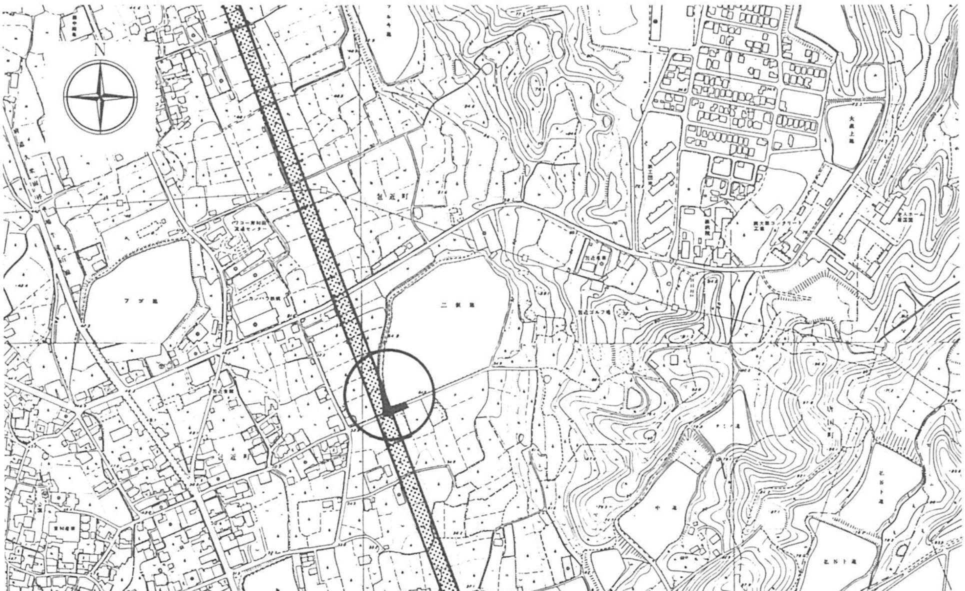
二俣池北遺跡の調査は、当協会が昭和62年度に行っている（第27図参照）。今回の調査は、主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴い、二俣池西側堤防を約10mほど東側（池の内側）に移築するための調査である。調査は二俣池渇水期の11月～12月に行った。調査はトレンチ３本による試掘調査を行い、遺構の有無を確認後、全面調査を行った。

１．西側堤防の試掘調査　（第28・29・30図、図版９）

二俣池は面積約25000平方メートルの溜池である。池は北東～南西方向に長く、不定形な菱形を呈し、池の北・南・東側には護岸工事が施されている。池の東側は荒れ



第27図　既往の調査地点

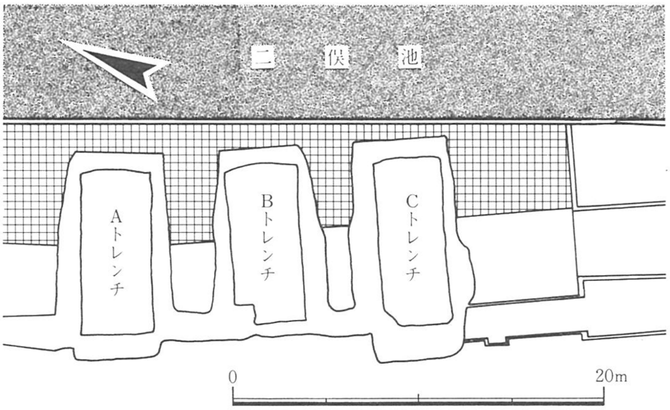


第28図　二俣池北遺跡調査地位置図

地でゴルフ場（包近ゴルフ場）に接しており、現状では東側に堤防施設は確認されなかった。西側の堤防は約150mに渡って護岸工事が施され、今回の調査はこの西側堤防の南端部の約45mについて行った。試掘調査は二俣池西側堤防に横断するように幅4mのトレンチを計３ヶ所設定して行った。調査は機械掘削の後、人力によって掘削したが、堤防の下部に進むにつれ、鋼粘土が堅く締まり掘削は困難であった。

各トレンチの土層観察の結果、堤防は３期の盛土層からなると思われる。上部盛土層は現在の二俣池堤防斜面を構成する擁壁（コンクリート擁壁）とその裏込め堆積物である。コンクリート擁壁を含む上部盛土層は、近辺の聞き取り調査や、岸和田市役所農水課に問い合わせたところ、昭和45・46年に護岸工事を行い築堤したものであると判明した。上部盛土層は、中部盛土層の一部を削り取った後、新たな盛土を行っている。盛土には鋼粘土を使用しているが、池の内側の粘土は水の作用によって還元され水成層となっている。池の内側は、灰色系の礫混粘土がほぼ水平に盛土されている。水成盛土層には遺物は含まれていなかった。中部盛土層は西から東になだらかに傾斜し、下位層の削剥面を覆う。斜面堆積する各層は、層厚数㎝から50㎝前後の比較的丁寧な盛土を行っている。盛土は灰黄色系の粘土及び粗粒砂～細砂を含む粘土層である。現存する全層厚は約1.8mであるが、池の外側は、上部盛土層の削平と、池の外側を走る水路工事の削平によって、削り取られている。本来の形状は不明である。本盛土層には、土師器・瓦器・染付磁器が含まれる。下部盛土層は全層厚70㎝を測る。池の内側は中部盛土層によって削平され、池の外側は上部盛土層によって切られているため、本来の形状は不明である。盛土はほぼ水平堆積で、層厚10㎝から40㎝の比較的丁寧な盛土である。下位層は近隣の調査などから古墳時代の遺構面に相当すると考えられる。断面観察の結果、この面から掘り込んだ柱穴を確認した。

今回の調査では、調査区の関係上、池の内側は擁壁までしか調査できなかったため、上部盛土層と池底堆積層の堆積状況についての確認はできな



第29図　二俣池西側堤防試掘トレンチ位置図

かった。また、池の外側についても調査範囲が限定されたことや、堤防外側の水路による削平によって、下部盛土層（旧堤防）の広がりや堆積状況についても確認できなかった。

２．西側堤防の検出遺構と遺物

試掘調査の結果、堤防の下に遺構の存在が確認されたため、大阪府教育委員会は全面発掘が必要であるとの判断を下し、その旨を大阪府土木本部に通知すると共に、大阪府埋蔵文化財協会に発掘調査の実施を指示した。

今回の調査で検出された遺構は竪穴式住居・ピット・土坑・溝などである。検出された遺構はすべて調査区の東側（池の外側）で確認された。調査区の西側（池の内側）で遺構が確認されなかったのは、堤防築堤時の削平によるものと考えられる。また、今回検出した遺構も、堤防西側を南北に流れる水路付設工事の際の削平と撹乱を受けており、遺構の遺存状態は悪く、遺物もほとんど出土しなかった。

土坑　（ＯＯ）

16－ＯＯ　（第31・35図）

調査区西側Ｂ01ＯＦ地区に位置する。西側を後世の撹乱によって削平されているため、本来の形状は不明であるが、逆Ｌ字状を呈する土坑である。検出長約1.1m、幅約48㎝、深さ6㎝前後を測る。埋土は褐色粘土（7.5ＹＲ4/3）である。堤防外側の水路付設の際に受けた削平のため全容は不明である。遺物は出土しなかった。

21－ＯＯ　（第31・35図）

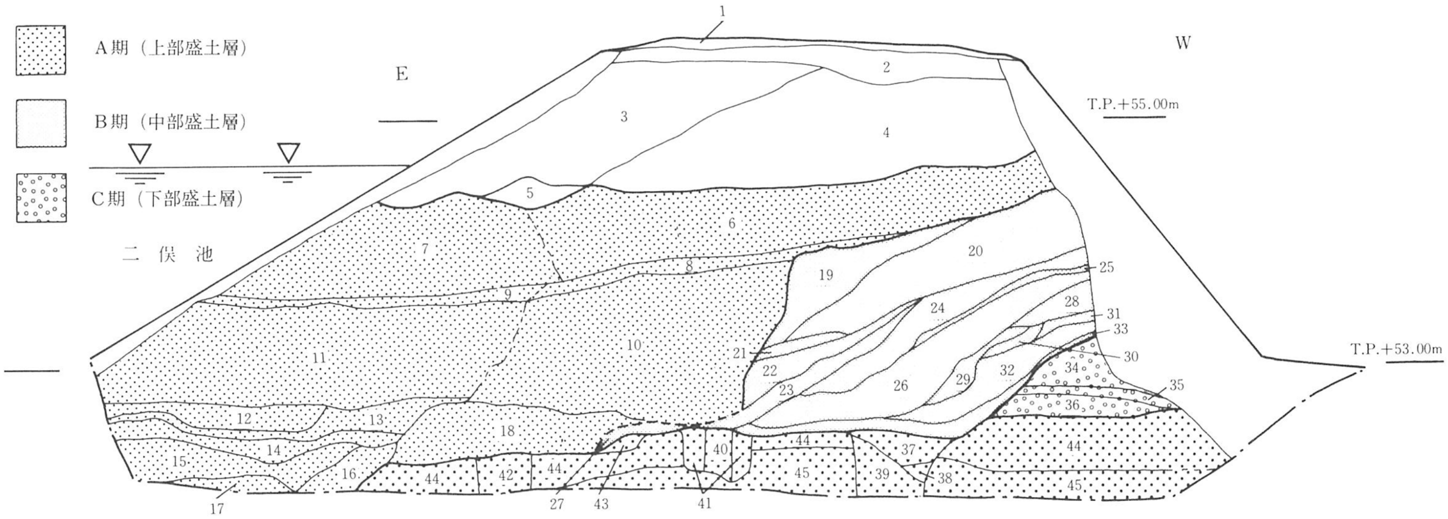
Ｂトレンチ西側のＢ01ＰＧ地区に接するように位置する土坑である。平面形は不定形な楕円形を呈し、長径約1.2m、短径約66㎝、深さ5㎝を測る。埋土は褐色粘土（7.5ＹＲ4/3）である。遺物は出土しなかった。

26－ＯＯ　（第31・35図）

調査区西側のＢ01ＱＦ地区に位置する。平面形は不定形な三角形を呈し、最大長約87㎝、幅約38㎝、深さ3㎝を測る。埋土は褐色粘土（7.5ＹＲ4/3）で、遺物は出土しなかった。

31－ＯＯ　（第31・35図）

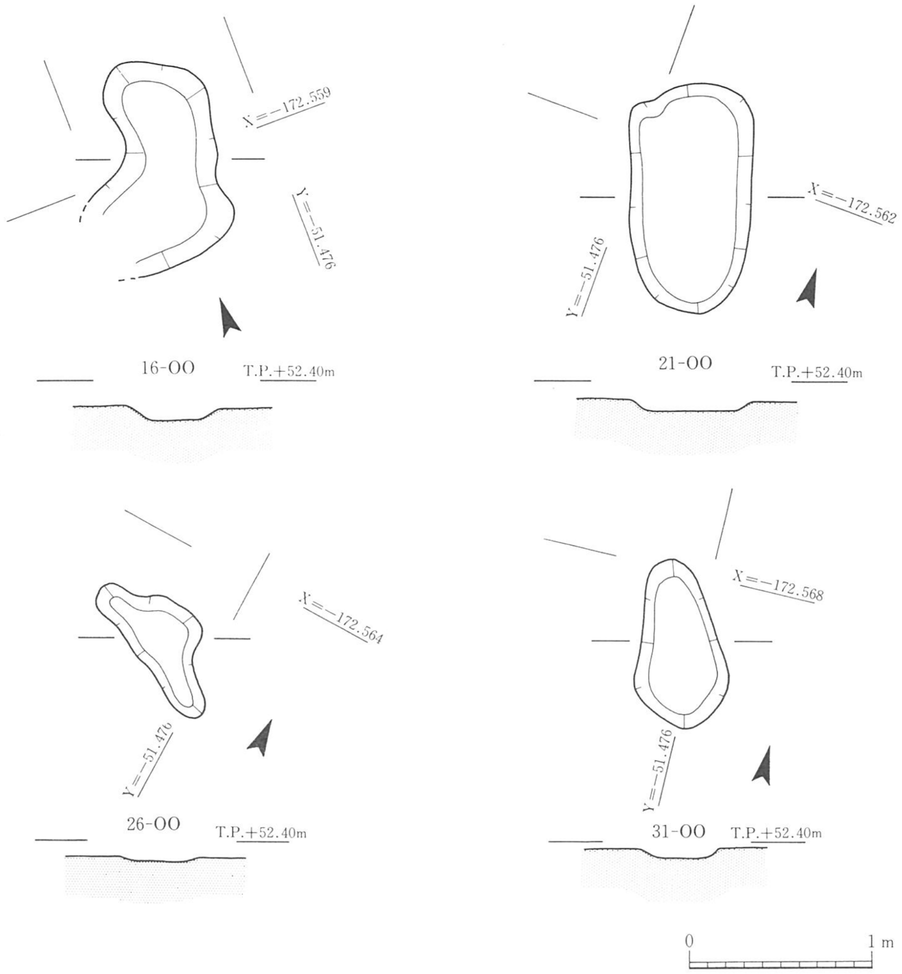
調査区西側のＢ01ＲＦ・ＲＧ地区にまたがって位置する土坑である。平面形は不定形な楕円形を呈し、長径約93㎝、短径約42㎝、深さ5㎝を測る。埋土は礫を多く含む褐色粘土（7.5ＹＲ4/3）である。遺物は確認されなかった。



1．2.5GY2/1 黒色土
2．5GY　7/1 明オリーブ灰色砂礫土
3．10YR 5/6 黄褐色砂礫土
4．10YR 6/3 にぶい黄橙色砂礫土
5．2.5GY5/1 オリーブ灰色粘土
6．5Y　6/3 オリーブ黄色砂礫土
7．5BG　5/1 青灰色シルト
8．10Y　6/1 灰色粘土
9．2.5GY5/1 オリーブ灰色粘土
10．10YR 6/2 灰黄褐色砂礫土
11．5GY　5/1 オリーブ灰色砂礫土
12．10YR 6/6 明黄褐色砂礫混シルト
13．5GY　5/1 オリーブ灰色粗砂混シルト
14．12と同色
15．13と同色
16．2.5Y　5/1 黄灰色粗砂混粘質土
17．7.5YR5/8 明褐色粘土
18．5Y　6/1 灰色粘土
19．7.5GY6/1 緑灰色粘土
20．2.5Y　6/6 明黄褐色シルト
21．5Y　5/1 灰色シルト
22．2.5Y 6/4 にぶい黄色粘土
23．5Y　7/2 灰白色粘土
24．7.5YR5/1 褐灰色シルト
25．10YR 6/4 にぶい黄橙色砂礫混シルト
26．7.5YR5/1 褐灰色弱粘質シルト
27．10YR 6/4 にぶい黄橙色粘質土
28．10YR 6/1 褐灰色シルト
29．10YR 7/1 灰白色弱粘質土
30．10YR 7/1 灰白色シルト
31．10YR 6/6 明黄褐色シルト
32．10YR 6/1 褐灰色シルト
33．2.5GY6/1 オリーブ灰色粘土
34．10YR 5/1 褐灰色小礫混シルト
35．10YR 6/1 褐灰色弱粘土
36．2.5Y　5/1 黄灰色シルト
37．5GY　5/1 オリーブ灰色粘土
38．5GY　5/1 オリーブ灰色砂礫土
39．7.5YR4/2 灰褐色弱粘質土
40．10YR 5/3 にぶい黄褐色弱粘質土
41．10YR 5/1 褐灰色弱粘質土
42．10Y　5/1 灰色粘土
43．10YR 6/2 灰黄褐色弱粘質土
44．10YR 6/4 にぶい黄橙色礫混弱粘質土
45．7.5YR5/6 褐色礫混粘質シルト

0　　4 m

第30図　二俣池西側堤防Ａトレンチ断面図



第31図　16・21・26・31－ＯＯ平面・断面図

ピット　（ＯＰ）

８－ＯＰ　（第32・35図）

調査区北側のＢ01ＭＧ・ＮＧ地区にまたがって位置する。平面形は円形を呈し、径約44㎝、深さ25㎝を測る。中央部に径約15㎝の柱痕跡をもつ。埋土は黒褐色粘土（10ＹＲ3/2）で、小石を多く含む。遺物は出土しなかった。

９－ＯＰ（第32・35図、図版12）

調査区北西のＢ01ＭＦ地区に位置する。平面形は不定形な楕円形を呈し、長径約46㎝、短径約30㎝、深さ23㎝を測る。やや南側に径約18㎝の柱痕跡をもつ。埋土は褐色粘土（7.5ＹＲ4/3）で小石を多く含み、褐灰色粘土（10ＹＲ5/1）をブロックとして多く含む。

遺物は出土しなかった。

10－ＯＰ　（第32・35図、図版12）

Ａトレンチ（試掘調査）南側のＢ01ＯＨ地区に位置するピットである。トレンチによって北半部が切られているため平面形は不明であるが、方形を呈するものと思われる。一辺約40㎝、深さ28㎝で、径約28㎝の柱痕跡をもつ。埋土は灰色粘土（10Ｙ5/1）で、小石を多く含む。遺物は出土しなかった。

11－ＯＰ　（第32・35図、図版12）

10－ＯＰの西側に位置するピットである。北半部がトレンチによって切られているため平面形は不明であるが、円形を呈するものと思われる。径約66㎝、深さ26㎝を測り、径約23㎝の柱痕跡をもつ。11－ＯＰと10－ＯＰの芯々間距離は約1.7ｍを測る。埋土は灰色粘土（10Ｙ5/1）である。建物としてのまとまりは確認できなかったが、建物の一部の可能性もある。遺物は出土しなかった。

12－ＯＰ　（第35図）

Ａトレンチ西側のＢ01ＯＦ地区に位置する。平面形は不定形な楕円形を呈し、長径約55㎝、短径約40㎝、深さ7㎝を測る。埋土は灰色粘土（10Ｙ5/1）で、遺物は出土しなかった。

13－ＯＰ　（第35図）

12－ＯＰ南側のＢ01ＯＦ地区に位置するピットである。平面形は不定形な楕円形を呈し、長径約33㎝、短径約20㎝、深さ3㎝を測る。埋土は灰色粘土（10Ｙ5/1）である。遺物は出土しなかった。

14－ＯＰ　（第32・35図、図版12）

調査区北西のＢ01ＯＦ地区に位置する。平面形は後世の撹乱（堤防外側の水路付設）のため東側半分を検出し得なかったが、ほぼ円形を呈するピットと思われる。径約48㎝、深さ24㎝を測り、中央部に径約22㎝の柱痕跡をもつ。埋土は２層に分かれ、上層は黒褐色粘土（10ＹＲ3/2）層、下層はオリーブ褐色粘土（2.5Ｙ4/3）層である。遺物は出土しなかった。

15－ＯＰ　（第32・35図、図版12）

14－ＯＰ南側のＢ01ＯＦ地区に位置する。北東側を後世の撹乱によって切られている。平面形は方形を呈するものと思われる。一辺約55㎝、深さ52㎝を測り、径約21㎝の柱痕跡をもつ。埋土は２層に分かれ、上層は黒褐色粘土（10ＹＲ3/2）層、下層はオリーブ褐色粘土（2.5Ｙ4/３）層である。遺物は確認されなかった。

17－ＯＰ　（第35図）

調査区西側のＢ01ＯＧ地区に位置する。平面形は不定形な円形を呈し、径約28㎝、深さ6㎝を測る。埋土は黒褐色粘土（10ＹＲ3/2）である。遺物は出土しなかった。

18－ＯＰ　（第35図）

調査区西側のＢ01ＯＦ・ＰＦ・ＰＧ地区にまたがって検出した。平面形は不定形な円形を呈し、径約53㎝、深さ6㎝を測る。埋土は褐色粘土（7.5ＹＲ4/3）である。遺物は出土しなかった。

19－ＯＰ　（第35図）

調査区西側のＢ01ＰＦ・ＰＧ地区に位置する。18－ＯＰの南側に接するように位置し、平面形は不定形な楕円形を呈する。長径約59㎝、短径約36㎝、深さ4㎝を測る。埋土は褐色粘土（7.5ＹＲ4/3）である。遺物は出土しなかった。

20－ＯＰ　（第35図）

調査区西側のＢ01ＰＧ地区に位置するピットである。平面形は円形を呈し、径約16㎝、深さ4㎝を測る。埋土は褐灰色粘土（7.5ＹＲ4/3）である。遺物は確認されなかった。

22－ＯＰ　（第35図）

21－ＯＯ南側のＢ01ＰＧ地区に位置するピットである。平面形はほぼ円形を呈し、径約54㎝、深さ約3㎝を測る。埋土は褐色粘土（7.5ＹＲ4/2）で、遺物は出土しなかった。

23－ＯＰ　（第35図）

Ｂ01ＰＧ地区に位置する。平面形は円形を呈し、径約17㎝、深さ28㎝を測る。埋土は灰色粘土（7.5ＹＲ4/3）である。遺物は出土しなかった。

24－ＯＰ　（第35図）

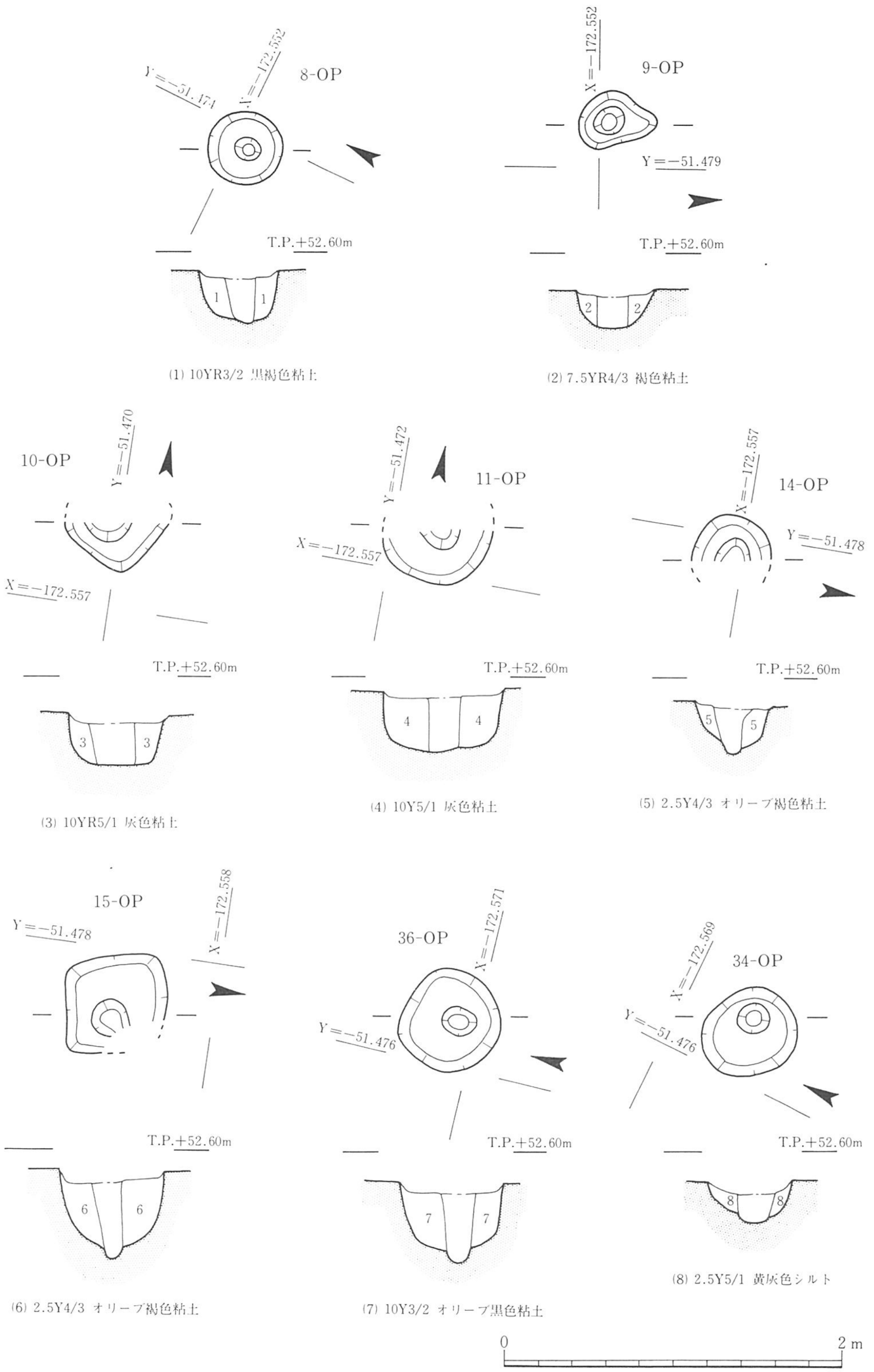
23－ＯＰ南側のＢ01ＰＧ地区に位置する。平面形は不定形な円形を呈し、長径約35㎝、短径約31㎝、深さ3㎝を測る。埋土は灰色粘土（10ＹＲ5/1）で礫を含む。遺物は確認されなかった。

25－ＯＰ　（第35図）

Ｂ01ＰＦ地区に位置するピットである。平面形は不定形な円形を呈し、径約21㎝、深さ4㎝を測る。埋土は灰色粘土（10ＹＲ5/1）で礫を含む。遺物は出土しなかった。

27－ＯＰ　（第35図）

調査区西側のＢ01ＱＧ地区に位置するピットである。平面形は不定形な楕円形を呈し、長径約46㎝、短径約31㎝、深さ11㎝を測る。中央部よりやや北東部に径約19㎝の柱痕跡を



第32図　8•9•10•11•14•15•34•36－ＯＯ平面・断面図

もつ。埋土は灰色粘土（10ＹR5/1）で礫を含む。遺物は出土しなかった。

28－ＯＰ　（第35図）

調査区西側のＢ01ＯＧ地区に位置する。平面形は不定形な楕円形を呈する。長径約57㎝、短径約42㎝、深さ3㎝を測る。埋土は灰色粘土（10ＹR5/1）である。遺物は出土しなかった。

29－ＯＰ　（第35図）

26－ＯＯ東側のＢ01ＱＧ地区に位置する。平面形は円形を呈し、径約34㎝、深さ4㎝を測る。埋土は灰色粘土（10ＹR5/1）で礫を含む。遺物は出土しなかった。

30－ＯＰ　（第35図）

調査区西側のＢ01ＱＦ・ＱＧ地区にまたがって位置するピットである。平面形はほぼ円形を呈し、径約63㎝、深さ13㎝を測る。埋土は灰色粘土（10ＹR5/4）で礫を含む。遺物は出土しなかった。

32－ＯＰ　（第35図）

調査区西側のＢ01ＲＧ地区に位置する。平面形は不定形な楕円形を呈し、長径約53㎝、短径約33㎝、深さ4㎝を測る。埋土は灰色粘土（10ＹR5/1）で礫を含む。遺物は出土しなかった。

33－ＯＰ　（第35図）

32－ＯＰ南側のＢ01ＲＧ地区に位置するピットである。平面形は円形を呈し、径約50㎝、深さ2㎝を測る。埋土は灰色粘土（10ＹR5/1）である。遺物は出土しなかった。

34－ＯＰ　（第32・35図、図版12）

調査区西側のＢ01ＲＧ地区に位置するピットである。平面形は不定形な円形を呈し、長径約56㎝、短径約49㎝、深さ25㎝を測る。中央部よりやや北側に径約18㎝の柱痕跡をもつ。埋土は黄灰色シルト（2.5Y5/1）である。

35－ＯＰ　（第35図）

調査区西側のＢ01ＲＧ地区に位置する。平面形は不定形な楕円形を呈し、長径約48㎝、短径約36㎝、深さ4㎝を測る。埋土は黄灰色シルト（2.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

36－ＯＰ　（第32・35図、図版12）

35－ＯＰ西側のＢ01ＲＧ地区に位置するピットである。平面形はほぼ円形を呈し、径約60㎝、深さ43㎝を測る。ほぼ中央部に径約21㎝の柱痕跡をもつ。埋土はオリーブ黒色粘土

（10Y3/6）で礫を含む。遺物は出土しなかった。

37－ＯＰ　（第35図）

調査区西側のＢ01ＲＧ地区に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、径約23㎝、深さ４㎝を測る。埋土はオリーブ黒色粘土（10Y3/2）である。遺物は出土しなかった。

38－ＯＰ　（第35図）

39－ＯＰ北側のＢ01ＲＧ地区に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、径約33㎝、深さ４㎝を測る。埋土はオリーブ黒色粘土（10Y3/2）で、遺物は出土しなかった。

39－ＯＰ　（第35図）

調査区西側のＢ01ＳＧ地区において検出された。平面形は不定形な楕円形を呈し、長径約29㎝、短径約24㎝、深さ7㎝を測る。埋土はオリーブ黒色粘土（10Y3/2）で礫を含む。遺物は出土しなかった。

40－ＯＰ　（第35図）

39－ＯＰ西側のＢ01ＳＧ地区に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、径約32㎝、深さ５㎝を測る。埋土はオリーブ黒色粘土（10Y3/2）で礫を含む。遺物は出土しなかった。

47－ＯＰ　（第35図）

27－ＯＰ西側のＢ01ＱＦ地区に位置するピットである。平面形はほぼ円形を呈し、径約63㎝、深さ20㎝を測る。ほぼ中央部に径約28㎝の柱痕跡をもつ。埋土は灰色粘土（10ＹＲ5/1）である。遺物は出土しなかった。

溝　（ＯＳ）

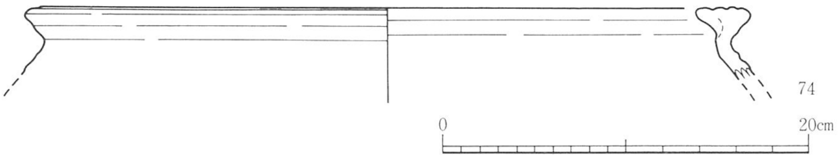
１－ＯＳ　（第35図）

調査区東側のＢ01ＭＧ・ＮＧ地区にまたがって位置する溝である。南北方向のもので、溝の北側は調査区外に延びており、南側はＡトレンチ（試掘調査）によって切られているためその全容及び規模は不明である。検出し得た規模は、長さ約5m、幅12～20㎝、深さ3㎝前後を測る。50－ＯＤの上層遺構である。埋土は灰色土（５Y5/1）である。出土遺物は瓦器碗の小片を２点出土した。いずれも磨滅が著しく図化できなかった。

２－ＯＳ　（第33・35図、図版19）

B01ＭＧ・ＮＧ・ＯＧ・ＯＨ・ＰＧ・ＰＨ・ＱＧ・ＱＨ・ＲＧ・ＲＨ・ＳＨ・ＴＨ・ＵＨ・ＵＩ・ＶＨ・ＶＩ地区にまたがって検出した。溝は調査区のほぼ中央部を南北方向に走り、溝の北側は調査区外に延びている。南側は二俣池の水門（樋）取付工事の際の削平、

撹乱を受けているため、全容は不明である。調査区内検出長約17m、幅20～80㎝、深さ17～50㎝を測る。埋土は2層に分かれ、上層は灰色粘土（5Y5/1）層で、下層は黄灰色砂礫（2.5Y6/1）層である。出土遺物としては須恵器片11点、土師器片2点、瓦器碗片4点、陶器1点（74)、瓦片2点などがある。いずれも小片であり、磨滅が著しいため図化できなかった。（74）は丹波焼甕の口縁部である。復元口径39.4㎝で、口縁端部を水平方向に拡張し、端面を作る。端面には回転ナデによる凹線を3条巡らせる。色調は褐色（7.5YR4/3）である。



第33図　2－OS出土土器

堅穴住居　（OD）

50－OD　（第34・35図、図版11）

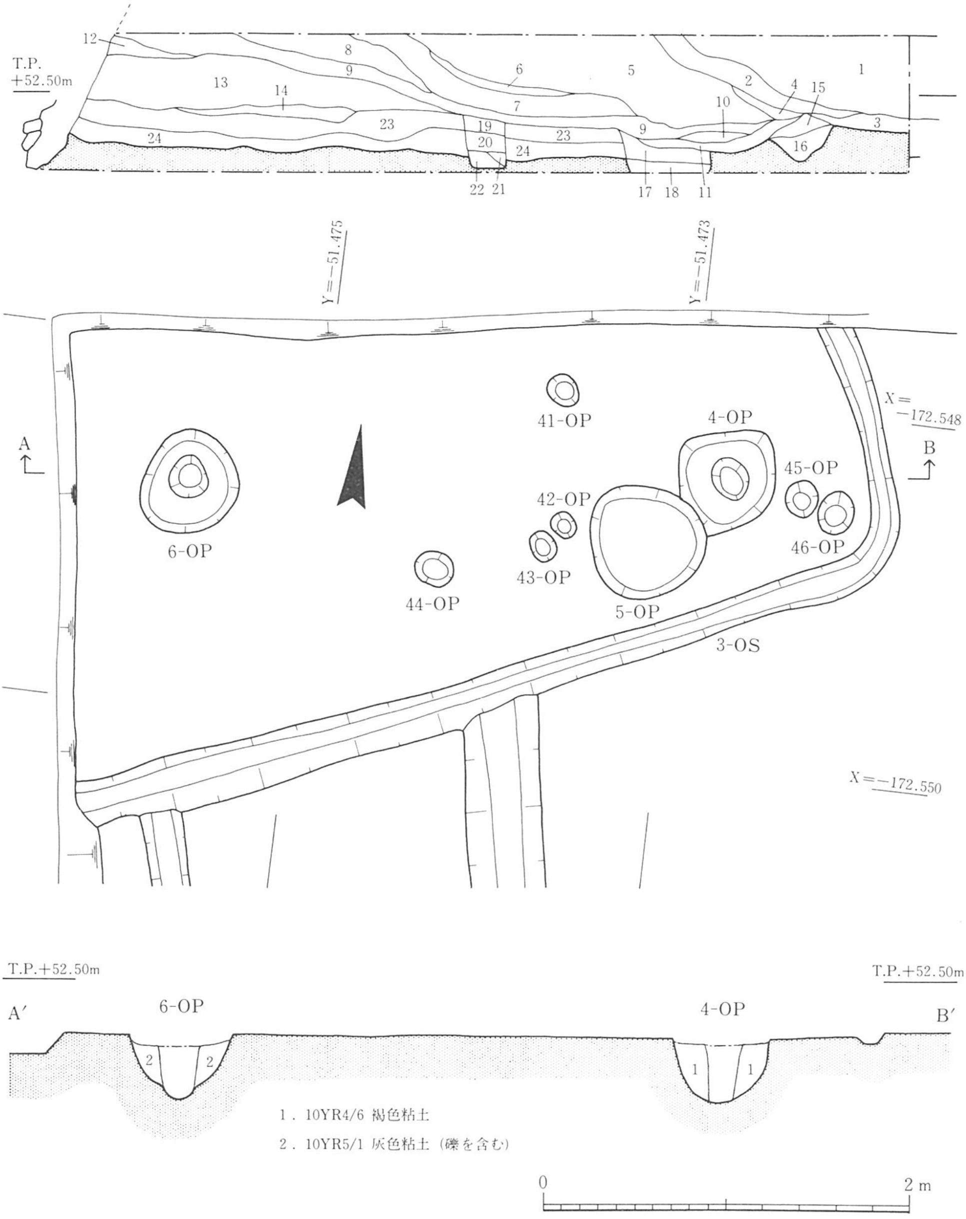
調査区北側のB01LG・MF・MG・MH地区にまたがって位置する。全体の1/2強は北側の調査区以外（二俣池西側堤防下）にあり、西側は堤防外側の水路付設工事によって削平されているため全容は不明であるが、隅丸方形を呈する竪穴住居跡と考えられる。調査区内現存長東西4.5m、南北（東側）1.2mを測る。推定規模は一辺5m前後で、床面積25㎡前後のものではないかと思われる。壁高は24㎝が現存していたが、池の内側に面する壁高は堤防築堤時の削平によって、ほとんどが失われている。壁直下には幅約15㎝、深さ2～3㎝のU字形を呈する壁溝が巡っている。

床面は南側がやや低く、中央部付近で約10㎝高くなっているのが確認された。おそらく地山を整形した「ベッド」状の台部が存在するのではないかと思われる。

主柱は4本柱と推定されるが、今回の調査では4－OPと6－OPの2柱穴を検出した。

4－OPは南西隅を5－OPによって切られているために全容は不明であるが、不定形な方形を呈するものと考えられる。一辺64㎝前後、深さ37㎝を測る。ほぼ中央部に径約24㎝の柱痕跡をもつ。埋土は褐色粘土（10YR4/6）である。

6－OPは不定形な円形を呈し、径約50㎝、深さ32㎝を測る。ほぼ中央部に径約23㎝の柱痕跡をもつ。埋土は灰色粘土（10YR5/1）で礫を含んでいた。4－OPと6－OPの



1．10YR 6/2 灰黄褐色砂礫層
2．5Y 7/2 灰白色粘土
3．5Y 6/1 灰色粘土
4．10YR 6/4 にぶい黄橙色粘質土
5．7.5YR5/1 褐灰色シルト
6．10YR 6/4 にぶい黄橙色礫混シルト
7．7.5YR5/1 褐灰色弱粘質シルト
8．10YR 6/1 褐灰色シルト
9．2.5GY6/1 オリーブ灰色砂混粘土
10．5GY 6/1 オリーブ灰色礫混粘土
11．10Y 6/1 灰色小石混粘土
12．5Y 7/2 灰白色シルト質砂層
13．10YR 5/1 褐灰色礫混シルト
14．2.5Y 5/1 黄灰色砂混シルト
15．10YR 6/8 明黄褐色粘土
16．2.5Y 7/6 明黄褐色シルト質粘土
17．2.5Y 6/4 汚れた純黄色粘土
18．5Y 6/1 汚れた灰色粘土
19．2.5GY5/1 オリーブ灰色砂層
20．7.5Y 6/3 オリーブ黄色弱粘土
21．7.5Y 6/1 汚れた灰色粘土
22．10Y 6/1 汚れた灰色礫混シルト
23．10YR 4/4 褐色粘土
24．10YR 5/4 にぶい黄褐色粘土

第34図　50－ＯＤ平面・断面図、北側断面図

柱穴間距離は2.9mであった。

埋土は下層からにぶい黄褐色粘土（10ＹＲ5/4）、褐色粘土（10ＹＲ4/4）である。今回の調査した範囲では炉跡は検出されなかった。遺物は出土しなかった。

第３表　二俣池北遺跡ピット計測表（西側堤防の調査）

遺構番号	地区名	掘方径	柱根径	深さ	埋土	遺物
4－ＯＰ	B01－MG	64	24	37	(10ＹR4/6) 褐色粘土	
5－ＯＰ	B01－MG	65	—	5	〃	
6－ＯＰ	B01－MG	57	23	32	(10ＹR5/1) 灰色粘土礫多く含む	
8－ＯＰ	B01－NG	44	15	25	(10ＹR3/2) 黒褐色粘土礫多く含む	
9－ＯＰ	B01－MF	46	18	23	(7.5ＹR4/3) 褐色粘土	
10－ＯＰ	B01－OH	50	28	28	(10Ｙ5/1) 灰色粘土礫多く含む	
11－ＯＰ	B01－OH	66	23	26	〃	
12－ＯＰ	B01－OF	55	—	7	〃	
13－ＯＰ	B01－OF	33	—	3	〃	
14－ＯＰ	B01－OF	48	22	24	(2.5Ｙ4/3) オリーブ褐色粘土	
15－ＯＰ	B01－OF	55	21	52	〃	
17－ＯＰ	B01－OG	28	—	6	(10ＹR3/2) 黒褐色粘土	
18－ＯＰ	B01－PF	53	—	6	(7.5ＹR4/3) 褐色粘土	
19－ＯＰ	B01－PG	59	—	4	〃	
20－ＯＰ	B01－PG	16	—	4	〃	
22－ＯＰ	B01－PG	54	—	3	〃	
23－ＯＰ	B01－PG	17	—	28	〃	
24－ＯＰ	B01－PG	35	—	3	(10ＹR5/1) 灰色粘土礫含む	
25－ＯＰ	B01－PF	21	—	4	〃	
27－ＯＰ	B01－QG	46	19	11	〃	
28－ＯＰ	B01－OG	57	—	3	〃	
29－ＯＰ	B01－QG	34	—	4	〃	
30－ＯＰ	B01－QG	63	—	13	〃	
32－ＯＰ	B01－RG	53	—	4	〃	
33－ＯＰ	B01－RG	50	—	2	〃	
34－ＯＰ	B01－RG	56	18	25	(2.5Ｙ5/1) 黄灰色シルト礫多く含む	
35－ＯＰ	B01－RG	48	—	4	〃	
36－ＯＰ	B01－RG	60	21	43	(10Ｙ3/2) オリーブ黒色粘土礫多く含む	
37－ＯＰ	B01－RG	23	—	4	〃	
38－ＯＰ	B01－SG	33	—	4	〃	
39－ＯＰ	B01－SG	29	—	7	〃	
40－ＯＰ	B01－SG	32	—	5	〃	
41－ＯＰ	B01－MG	19	—	45	(10ＹR5/1) 灰色粘土	
42－ＯＰ	B01－MG	15	—	3	〃	
43－ＯＰ	B01－MG	16	—	33	〃	
44－ＯＰ	B01－MG	22	—	24	〃	
45－ＯＰ	B01－MG	20	—	3	〃	
46－ＯＰ	B01－QG	23	—	7	〃	
47－ＯＰ	B01－QF	63	28	20	〃	

凡例：「地区名」は代表地区名、「掘方径」「柱根径」「深さ」の単位は㎝。